

2006～2008年度 科学研究費補助金 基盤研究(c)

研究成果報告書

文献に現れた語彙・語法と国語史の不整合性について

課題番号 18520353

2009年3月

研究代表者

大阪大学大学院文学研究科

蜂 矢 真 郷

研 究 組 織

研究代表者：蜂 矢 真 郷（大阪大学大学院文学研究科教授）

研究分担者：金 水 敏（大阪大学大学院文学研究科教授）

研究分担者：岡 島 昭 浩（大阪大学大学院文学研究科准教授）

研究協力者：

大阪大学大学院文学研究科博士後期課程学生

嶋 野 恵 介（編集補助）

藤本真理子 清 田 朗 裕 竹村明日香

大阪大学大学院文学研究科科目等履修生

蜂 矢 真 弓

研 究 経 費

2006年度	直接経費	150万円	間接経費	0円
2007年度	直接経費	90万円	間接経費	27万円
2008年度	直接経費	110万円	間接経費	33万円
総 計				410万円

研究発表

(1) 著書

金水 敏・乾 善彦・渋谷勝己（共編著）『日本語史のインタフェース』
シリーズ日本語史4、2008年7月、岩波書店、金水の担当は第1章・第7章

(2) 学会誌等

蜂矢真郷「促音・撥音の現代ローマ字表記」
『国語文字史の研究』9、pp. 221-236、2006年4月、国語文字史研究会

蜂矢真郷「タテ〔縦〕・ヨコ〔横〕とその周辺」
『語文』86、pp. 9-20、2006年6月、大阪大学国語国文学会

蜂矢真郷「ト〔利〕をめぐる語群」
『親和国文』41、pp. 141-158、2006年12月、神戸親和女子大学国語国文学会

蜂矢真郷「『日本唱歌集』の形容詞」
『国語語彙史の研究』26、pp. 273-284、2007年3月、国語語彙史研究会

蜂矢真郷「上代特殊仮名遣に関わる語彙」
『萬葉』198、pp. 1-36、2007年6月、萬葉学会

蜂矢真郷「ヲ〔小〕とコ〔小〕」
『國學院雑誌』108-11、pp. 38-50、2007年11月、國學院大学

蜂矢真郷「ト〔門〕とト〔戸〕とト〔外〕」
『京都語文』14、pp. 4-19、2007年11月、佛教大学国語国文学会

蜂矢真郷「現代仮名遣いの長音表記」
『国語文字史の研究』10、pp. 283-296、2007年12月、国語文字史研究会

蜂矢真郷「語の変容と類推 ——語形成における変形について——」

『国語語彙史の研究』27、pp. 273-284、2008年3月、国語語彙史研究会
飯倉洋一氏編『テキストの生成と変容』、pp. 174(33)-164(43)、2008年3月、
2005-2007年度 大阪大学大学院文学研究科 広域文化表現論講座共同研究 研究成果報告書

蜂矢真郷「テ〔手〕とその周辺」

『待兼山論叢 文学篇』42、pp. 1-21、2008年12月、大阪大学文学会

蜂矢真郷「『新編左千夫歌集』の形容詞」

『国語語彙史の研究』28、pp. 101-118、2009年3月、国語語彙史研究会

金水 敏「古代・中世日本語用例のローマ字表記について」

『文法と音声』V、pp. 177-190、2006年9月、音声文法研究会

金水 敏「日本語アスペクトの歴史的研究」

『日本語文法』6-2、pp. 33-44、2006年9月、日本語文法学会

金水 敏「「～でいる」について」

益岡隆史・野田尚史・森山卓郎（編）『日本語文法の新地平 1 形態・叙述内容編』、pp. 143-156、2006年10月、くろしお出版

金水 敏「日本（語）への発信・日本（語）からの発信（シンポジウム「歴史語用論：その可能性と課題」）」

『語用論研究』8、pp. 67-68、2006年12月、日本語用論学会

金水 敏「言語コミュニティと文体・スピーチスタイル」

伊井春樹（監修）加藤昌嘉（編集）『源氏物語のことばと表現』講座 源氏物語研究8、pp. 9-29、2007年4月、おうふう

金水 敏「言と文の日本語史」

『文学』8-6（11・12月号）、pp. 2-13、2007年11月、岩波書店

金水 敏「翻訳における制約と創造性 ——役割語の観点から——」

飯倉洋一氏編『テキストの生成と変容』、pp. 61-66、2008年3月、
2005-2007年度 大阪大学大学院文学研究科 広域文化表現論講座共同研究 研究成果報告書

岡島昭浩「〈五音歌〉の変容 ——外郎売りと姓名判断——」

飯倉洋一氏編『テキストの生成と変容』、pp. 136(71)–128(79)、2008年3月、
2005–2007年度 大阪大学大学院文学研究科 広域文化表現論講座共同研究 研究成果報告書

(2) 口頭発表・講演等

蜂矢真郷「上代特殊仮名遣に関わる語彙」

萬葉学会 第59回全国大会・講演会、於日本女子大学、2006年10月

蜂矢真郷「ト〔門〕とト〔戸〕とト〔外〕」

佛教大学国語国文学会 第11回大会・講演、於佛教大学、2006年11月

蜂矢真郷「語の変容と類推 ——語形成における変形について——」

大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座 2005～2007年度共同研究
「テキストの生成と変容」（代表者：飯倉洋一氏）第14回研究会、於大阪大学、
2007年7月

蜂矢真郷「二音節語基と形容詞語幹」

国語語彙史研究会 第90回、於龍谷大学大宮学舎、2008年12月

金水 敏「現代に生きる古典日本語（招待パネル“Classical Japanese” Chair : Haruo Shirane）」

2006日本語教育国際研究大会、The Association of Teachers of Japanese / National Council of Japanese Language Teachers, コロンビア大学、ニューヨーク市、2006年8月

(3) 出版物

岡島昭浩「『積ん読』の語誌」

南陀楼綾繁＋積ん読フレンズ『山からお宝 本を積まずにはいられない人のために』
けものみち文庫2、pp. 56–57、2008年12月、けものみち計画

はじめに

本研究「文献に現れた語彙・語法と国語史の不整合性について」は、前回の二〇〇三・二〇〇四年度「文献に現れた述語形式と国語史の不整合性について」（以下、前研究と呼ぶ）に引き続いて、「口語性」と不連続・不整合を見せる語彙ないし形態を積極的にとり挙げ、その由来、発展の過程を明らかにしようとするものである。

従来の国語史研究は、「口語性」を反映していると言われる文献が特に重視されてきた。また、必ずしも口語的でない文献からも、「口語性」が露呈していると言われる部分を、言わば恣意的に取り出して利用するということが行われてきたところがある。前研究および本研究は、このような従来の観点を裏返し、「口語性」と不連続・不整合を見せる語彙ないし形態を積極的に取り上げるものであり、これまでは切り捨てられてきた資料に光を当てることによって、国語のより豊かな実態が明らかになるであろうと考えるものである。本研究を押し進めることにより、国語（日本語）の歴史的な流れはより重層的・立体的にとらえられることになると思われ、従来の国語観・国語史観に大幅な変化が迫られることもあり得る。

具体的には、近世・近代における文語文における語彙・語法を中心としてとり挙げる。前研究では「述語形式」に限って検討してきたが、本研究では、対象とする範囲を広げて、名詞や接頭語についても検討して行くことにする。擬古文が目指すのは主に中古であると言われるが、前研究や本研究により、中古よりむしろ上代を目指した擬古的表現もかなりあることを明らかにできたと思われる。口語との接触、また、その他の理由により、変形を受けることもあるなど、いろいろな語彙・語法のあり方についても検討してきた。その他にも、本研究の標題のもとに、理論的な面を含めてそこから広がる問題についてとり挙げて行くものである。

金水敏教授・岡島昭浩准教授の分担とともに、国語学専門分野の大学院学生等の協力を得て、この報告書を作成する。当初の目的が十分に達せられたとはいい難いところもあるが、これらの分担・協力によってよい報告書になったと信じている。

大阪大学大学院文学研究科教授（国語学）

目次

『日本唱歌集』の形容詞

ヲ「小」とコ「小」

語の変容と類推 —— 語形成における変形について ——

『新編 左千夫歌集』の形容詞

日本語史のインターフェースとは何か

「積ん読」の語誌

連体助詞を伴う名詞被覆形による擬古的複合名詞

抄注・北原白秋第二詩集『思ひ出』語彙

蜂 矢 真 郷 1

蜂 矢 真 郷 12

蜂 矢 真 郷 26

蜂 矢 真 郷 42

金 水 敏 58

岡 島 昭 浩 79

蜂 矢 真 弓 82

蜂 矢 真 郷 他 93

『日本唱歌集』の形容詞

蜂 矢 真 郷

堀内敬三・井上武士両氏編『日本唱歌集』^(注1)には、一八八一「明治一四」年～一九四五「昭和二〇」年の一六二曲の唱歌が収載されているが、本稿は、それらの唱歌の、とりわけ文語体のものに見える形容詞の、注意される例について検討しようとするものである。その検討に当たっては、金田一春彦・安西愛子両氏編『日本の唱歌』^(注2)「上」・「中」・「下」、糸井通浩氏『風呂で読む唱歌』^(注3)をも参照することにした。

一

まず、補助活用（カリ活用）の例を挙げる。

しカラズ

国府津おるれば馬車ありて／酒匂小田原とおからず／箱根八里の山道も／あれ見よ雲の間より（鉄道唱歌（東海道篇）・一二二、

大和田建樹）

日はあつからず／寒からず／雲なき空の　ここちよや／若葉の中に　咲き残る／躑躅たずねん　もろともに（散歩唱歌・夏・二、

大和田建樹）

……／美しからずや咲く水芭蕉／春の日の　この北の国幸多し（都ぞ弥生（北大明治四十五年寮歌）・四、横山芳介）

しカラシ　……／山には、小牛を追いながら、朝露踏分け登りゆく／少女の歌や高からん。（朝日は昇りぬ・二、文部省唱歌）

未然形カラの例ばかりであり、しカラズの例が四例（三曲）、しカラシの例が一例と、多くない。終止形カリなどのような、鈴木丹

士郎^(注4)氏の言われる「補助活用の本活用化」の例は見えない。カラムは、上代ではケムの形をとるが、上代に見える未然形ケの例は見えない（上代に見える已然形ケの例も見えない）。

なお、「朝日は昇りぬ」の「高^{たか}からん。」（二）の例は、「海士人^{あまびと}今^{いま}や勇^{いさ}むらん。」（一）、「機^き械^{かい}の音^{おと}や響^{ひび}くらん。」（三）と対になっていて、「らん。」で終わることは共通しているが、形容詞未然形＋助動詞^(ム)（二）と動詞終止形＋助動詞ラン^(ム)（一／三）とは異なっていて、この対は完全なものではない。

次に、ケシ型形容詞の例を挙げる。

サヤケシ 九つとや、心は玉^{たま}なり、琢^{みが}きみよ、く。／ひかりは さやけし、／秋の月、あきの月。^(かせ)数えうた・九

ノドケシ

春爛漫^{はるらんまん}の花の色／紫^{むらさき}匂^{にお}う雲間^{くもま}より／紅^{くれなゐ}深^{あさひ}き朝日^{かげ}影／長閑^{のど}けき光^{ひかり}さし添^そえば／鳥は嘯^{ささ}り蝶^{てふ}は舞^まい／散^くり来る花も光あり（春爛漫の花の色（二高第十一回記念祭歌）・一、矢野勘治）

鳥啼^{からすな}きて木^きに高^{たか}く、／人^{ひと}は畑^{はた}に麦^{むぎ}を踏^ふむ。／げに小春日^{こはるび}ののどけしや。／かえり咲^さの花^{はな}も見^みゆ。^(冬景色・二、文部省唱歌)

ハルケシ 窓^{まど}うつ嵐^{あらし}に、夢^{ゆめ}もやぶれ、／遙^{はる}けき彼方^{かなた}に、こころ迷^{まよ}う。／恋^{こひ}しやふるさと、なつかし父母^{ちちはは}、／思^{おも}いに浮^うぶは、杜^{もり}のこず

え。／窓^{まど}うつ嵐^{あらし}に、夢^{ゆめ}もやぶれ、／遙^{はる}けきかなたに、心まよう。^(旅愁・二、犬童球溪)

シヅケシ 木^この間の泉^{いずみ}の、夜^よとなる哀^{かな}しさ。／静^{しず}けき若葉^{わかば}の身^みぶるい夜霧^{よぎり}の、白^{しろ}き息^{いき}。^(夜・一、与謝野晶子)

ツユケシ 御心^{みこころ}ならぬいでましの／御袖^{みそで}露^{つゆ}けき朝戸^{あさと}出^でに、／誦^{ずん}じて笑^えますかしこさよ、／桜^{さくら}の幹^{みき}の十字^{じゅうじ}の詩^し。／……^(児島高德・一、文部省唱歌)

文部省唱歌

ケシ型形容詞には、カ（・ヤカ・ラカ）型語幹との対応を持つ一次的ケシ型と、それを持たない二次的ケシ型とがあるが、右の多くは一次的ケシ型であり、二次的ケシ型はツユケシのみである。また、右のケシ型形容詞は、二次的ケシ型を含めて、上代ないし中古に例の見えるものばかりであり、サヤケシ（萬三三三四）・ノドケシ（古今八四）・ハルケシ（萬三九八八）・シヅケシ（古今一八八）のようである。しかも、中世の和歌にも用いられるものばかりであり、例えば、新古今和歌集には、サヤケシ^(四〇二二)（二七八二）・ノドケシ（三七一）・ハルケシ（七四四）・シヅケシ（一九二三）・ツユケシ（一一六五）のようである。

ケシ型形容詞とは別に、次のような例も見える。

アタタカシ 来れや友よ 打つれて／愉快に今日は 散歩せん／日は暖かく 雲はれて／けしき勝れて よき野辺に（散歩唱歌・春・一、大和田建樹）

カ型語幹アタタカに対応する一次的ケシ型としてアタタケシ（新撰字鏡・享和本）がある（仮名書き例ではないが、萬葉集三三六番歌にも例が見える）が、アタタケシではなく、江戸時代に見えるアタタカイ（咄・軽口御前男三・三）の文語形であるアタタカシが用いられている。^{（注）}なお、アタタケシは、中世以前の和歌では、萬葉集の他に千里集一〇（夫木和歌抄一四三〇も同様）の例が拾えるぐらいである。

そして、x(ヲ)yミのミ語法のものであるが、少なく、次の例のみである。

港を遠み夜はくらく／さかまく怒濤の大洋に／木の葉の如く漂える／梶の緒絶えたる小舟すら／遙かに見ゆる明星の／光に行手を定むなり（春爛漫の花の色（一高第十一回記念祭歌）・五、矢野勘治）

正岡子規や長塚節の短歌にミ語法が多く用いられていることと大きく異なっていると言える。^{（注）}

二

次に注意されるものとして、マ「真」とク活用形容詞シロシの語幹シロ「白」との複合したマシロ「真白」がある。^{（注）}

マシロニ

真白に細き手をのべて 流るる血しお洗い去り／まくや繻帶白妙の 衣の袖はあけにそみ（婦人従軍歌・四、加藤義清）

ましろに、みえし、ゆき、きえて、／のは、おもしろく、なりにけり。／……（春の野・一、田辺友三郎）

マシロノ 牧場の若草陽炎燃えて 森には桂の新緑萌し／雲ゆく雲雀に延齡草の 真白の花影さゆらぎて立つ／今こそ溢れぬ清和の光 小河の潯をさまよい行けば／……（都ぞ弥生（北大明治四十五年寮歌）・四、横山芳介）

マシロキ

春は桜のあや衣、／秋は紅葉の唐錦、／夏は涼しき月の絹、／冬は真白き雪の布。／見よや人々美しき／この天然の織物を。／手際

見事に織りたまふ／神のたくみの尊しや。(美しき天然・二、武島羽衣)

真白き富士の根 緑の江の島／仰ぎ見るも 今は涙／帰らぬ十二の 雄々しきみたまに／捧げまつる 胸と心 (七里ヶ浜の哀

歌・一、三角錫子)

……／荒野の吹雪さながらに、／落つるよ落つるよ、真白き流 (滝・一、文部省唱歌)

別に述べたように、マシロニは「田子の浦ゆうち出でて見ればま白にそ〈真白(三)衣〉富士の高嶺に雪は降りける」(萬三二八)のよう
に上代から例が見え、マシロノも「矢形尾の真白の鷹を〈麻之路能鷹乎〉やどにする擽き撫で見つつ飼はくし良しも」(萬四五五)
のように上代から例が見える。

それに対して、マシロキは、明治以降の例しか見当たらない。以前に述べたように、長塚節の短歌に、「吹きたまる雪が真白き篠の
群の椿が花はおもしろきかも」(一九〇六〔明治三九〕年一月二一日詠)の例が見えるが、『日本唱歌集』によると「美しき天然」は一九〇
五〔明治三八〕年一〇月に単行唱歌集として発行されていて、長塚節の短歌より古い。「美しき天然」の例は、「夏は涼しき月の絹」と「冬
は真白き雪の布」とが対になっているので、「涼しき」と同様に「キの形をとる必然性はあると言える。なお、「七里ヶ浜の哀歌」が作
られる事情は、安田寛氏『「唱歌」という奇跡 十二の物語 讃美歌と近代化の間』に詳しい。

三

その他に、注意される形容詞ないし形容詞の用法の例を挙げる。

イチジルク 庭に一本棗の木／弾丸あともいちじるく／くずれ残れる民屋に／今ぞ相見る、二將軍(水師營の会見・二、文部省
唱歌〔佐佐木信綱〕)

イチシルシは、村田菜穂子氏『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』の言われるように、本来ク活用であるが、後にシク活用にも活用
する両活用形容詞で、さらに後には完全にシク活用形容詞になるものである。ただ、シク活用の早い例としては、「又入道もいちしる
しき人にて、思ひ直さるゝ事も有なんと申しければ」(源平盛衰記三)などの例が挙げられることが多いが、これらは確実ではなく、

「イチシルシク分明ニ見知ルヲ省見ト云也」(四河入海)頃まで下るようである。また、イチジルシと連濁するのも、「。掲焉イチャシルシ明白カ、グイックン」(文明本節用集)のように室町時代のものである。それに対して、ここではイチジルシの形でク活用に使われていることが注意される。重複形容詞は、阪倉篤義氏「歌ことばの一面」(注15)が述べられるように、和歌に使われにくいものの一つであるが、唱歌においてどうであるかと見ると、次のような例が見える。

モノモノシ あな、物々ものものし、八万騎はちまんき。／大将師直たいしようもろなおいづくにか。／かれの首を取らずんば、／ふたたび生きて還るまじ。(四条畷・二、

大和田建樹)

オオシ

鈴すずかと見えて 遠くまで／光る梢こすえの くだものは／柿かきか 蜜柑みかんか 橙だいだいか／霜にも枯かれぬ 雄々おおしさよ(散歩唱歌・冬・四、大和

田建樹)

真白ましろき富士の根 緑の江の島／仰あおぎ見るも 今は涙なみだ／帰らぬ十二の 雄々おおしきみたまに／捧ささげまつる 胸むねと心こころ (七里ヶ浜の哀

歌・一、三角錫子)

豊ゆたかに稔みのれる石狩の野に 雁かりがねはるばる沈みてゆけば／羊群ようぐん声なく牧舎ぼくしやに帰り 手稻ていねの巔いた 黄昏たそがれこめぬ／雄々おおしく聳そびゆる楡エルムの梢こすえ
打振うちふる野分のわきに破壊はえの葉音はのおとの／……(都ぞ弥生(北大明治四十五年寮歌)・二、横山芳介)

母こそは、み国の力。／おの子こらをいくさの庭に／遠くやり、なみだ隠かくす。／おおしきかな、母の姿。(母の歌・二、文部省唱歌

〈野上弥生子〉)

オオシ「雄々」は、一音節の重複素の重複であるので、全体の音節数が少なく、それ故に重複形容詞の中では用いられやすいかと見られる。なお、「母の歌」では、「母」という女性に対してオオシが用いられている。オオシは、男性を表す名詞ヲ「…汝なを置きて男をはなし(遠波那志)…」(記神代・五)の重複であり、通常は男性に対して用いられるものであつて、これは違例と言える。因みに、女性を表す名詞メ「…吾あはもよ女めにしあれば(賣逆斯阿礼婆)…」(同)の重複であるメメシ「女々」は、通常は女性に対して用いられるのではなく男性に対して用いられるものであることに留意しておきたい。

アナココチヨヤ・アナトウトシヤ 見渡みわたすかぎり遙々はるばると 海原うなばらうずむ漁業船ぎよぎようせん。／獲物えものを祝いおう声々こえこえは 天てんを揺ゆりて、空そらかきくもり、

／海を動し、波ひるがえる。／あな、ここちよや。勇しや。(一)／見渡すかぎりはてもなく、浜辺に築く魚の山。／この山こそはわが国の富国の礎、利民の基。／茂木立木の何たぐいぞは。／あな、とうとしや。めでたしや。(二)(漁業の歌、中村秋香)

アナココチヨヤ(一)は、感動詞アナナク活用形容詞語幹十終助詞ヤであり、問題はないが、アナトウトシヤ(二)は、感動詞アナナク活用形容詞終止形十終助詞ヤであつて、ク活用形容詞終止形十終助詞ヤのみであれば問題ではないが、感動詞アナとともに用いるのは通常ではない。音節数を合わせるためにそのようにしているとはよく理解されるが、よろしくはないと言える。

ウマシユメ・メグシワクゴ 眠れ眠れ、可愛し緑子、母君に抱かれつ、／ここちよき、歌声に、むすばずや、美し夢。(美し夢・一、近藤朔風(訳))

ウマシは、上代において、ク活用の語幹の用法の例であるウマヒト「…貴人は(宇摩比等破)貴人どちや(于摩譬菩奴知野)…」(神功紀・二八)などとともに、シク活用の語幹の用法の例であるウマシアシカビヒコヂノカミ「宇摩志阿斯訶備比古遲神(此神名)」(記神代)なども見えるが、このウマシユメはシク活用の語幹の用法の例である。ウマシがこの両者の用法を持つことについては、橋本四郎氏「うまし」・林浩恵氏「形容詞語幹の用法の違例」が述べられていて、両氏が述べられるように、ウマシの両者の例には意味の差違が認められ、林氏によれば、前者は「状態・感覚の意味」を、後者は「評価・感情的意味」を表すものである。そしてまた、このウマシユメの例も「評価・感情的意味」を表すと言える。

なお、「美し夢」は、通称「シユーベルトの子守歌」のことで、「むすばずや、美し夢」の部分は、内藤水翟(濯)訳では「結べよや、樂し夢。」となっている『日本の唱歌』(中)による)が、この「樂し夢」もシク活用形容詞の語幹の用法である。

他方、メグシは、『時代別国語大辞典上代編』にク活用形容詞として項が立てられている。「…相見れば常初花に心ぐし(情具之)愛しもなしに(眼具之毛奈之尔)…」(萬三九七八)などの例からク活用であることを確認することはできないが、「我が(之)小子の偏に鍾(り)て愛クいましは、」(西大寺藏 金光明最勝王經平安初期点・春日政治氏釈文)の例によってク活用と確認できる。

ところが、メグシワクゴの例はシク活用の語幹の用法の例である。『日本唱歌集』によると「美し夢」は「女声唱歌」(一九〇九「明治四二年一月」)に掲載されているが、ほぼ同時期の伊藤左千夫の短歌に「手をめぐし足をめぐしみ緑児の手足よこし、猶しめぐしも」(一九〇八「明治四二年詠」)、「幼児は泣くもめぐしき七人の親なるからに然るにかあらむ」(同)の例があり、先の短歌にはメグシが三度

用いられているが、二つ目のメグシはメグシミとあってシク活用の語幹の用法の例であり、また、後の短歌のメグシはシク活用に活用している。「美し夢」と左千夫の短歌との影響関係は明らかでないが、注意されるところである。

四

さて、「戦友」（真下飛泉）に見える形容詞連体形には、問題がある。

ここは御国を何百里／離れて遠き満州の／赤い夕日に照らされて／友は野末の石の下（一）

軍律きびしい中なれど／これが見捨てて置かりようか／「しつかりせよ」と抱き起し／仮縋帯も弾丸の中（四）

肩を抱いては口ぐせに／どうせ命はないものよ／死んだら骨を頼むぞと／言いかわしたる二人仲（二）

思いもよらず我一人／不思議に命ながらえて／赤い夕日の満州に／友の塚穴掘ろうとは（二二）

筆の運びはつたないが／行燈のかげで親達の／読まるる心おもいやり／思わずおとす一雫（一四）

「遠き満州」（一）と連体形キ（文語形）が用いられているが、その他は「赤い夕日」（一／一二）、「軍律きびしい中」（四）、「命は

ないもの」（二）、「つたないが」（一四）と連体形イ（口語形）が用いられていて、一貫していない。右のうち、「命はないもの」（一）

一）は、「言いかわしたる」言葉であるので、口語形が用いられることに必然性があつた可能性があり、「つたないが」（一四）は、連

体法ではなく接続助詞方に続いているので、他と異なることもあるかと思われるが、他の口語形の例は特にそうしたことがある訳で

はない。とりわけ、同じ一番の中に「遠き満州」と「赤い夕日」の両形が見えるのは落ち着かない。

因みに、「戦友」には、この他にも、「お国が見えなくなった時」（九）のように、気になる言葉遣いが見える。^{（正20）}

ところで、「戦友」と同様に、連体形キ（文語形）と同一（口語形）とがともに用いられている唱歌が、他にもある。『日本唱歌集』

には収載されていないが、「われは湖の子さすらいの（三高琵琶湖周航の歌）」（小口太郎）（通称「琵琶湖周航の歌」）である。『日本の

唱歌』〔下〕によって挙げる。

松は緑に砂白き／雄松が里の乙女子は／赤い椿の森蔭に／はかない恋に泣くとかや（二）

波の間に間に漂えば／赤い泊火懐かしみ／行方定めぬ浪枕／今日は今津か長浜か（三）

瑠璃の花園珊瑚の宮／古い伝えの竹生島／仏の御手に抱かれて／眠れ乙女子安らけく(注21)(四)

矢の根は深く埋もれて／夏草しげき堀のあと／古城にひとり佇めば／比良も伊吹も夢のごと(五)

右のように、文語形二例と口語形四例とが混在している。とりわけ、同じ二番の中で「砂白き」(文語形)と「赤い椿」「はかない恋」(口語形)とが混在しているのは落ち着かない。

この「砂白き」はどこにかかるか直ちに明確ではなく、「砂白く」と連用形中止法であるべきところかと思われもするが、他方で、「夏草しげき堀」(五)と文語形がありこれは「堀」にかかっているのです、この点に留意するならば、「砂白き」は「雄松が里」にかかると見るのがよいかと思われてくる。その場合に、「砂白き」は「砂白い」とすると終止形のように見られるおそれがあるので「砂白き」とした可能性も考えられないではない。とすると、「夏草しげき堀」とした理由もありそうである。すなわち、シゲイはありにくい形態であることである。工藤力男氏「中世形容詞の終焉」・北原保雄氏「形容詞の語音構造」(注22)が言われるように、ク活用で語幹末がエ列の形容詞は「中世末から近世にかけて衰退する」(工藤氏)ものであり、その後はありにくく、シゲシもその中に入る。「衰退」の理由は、シゲイというエ列長音を持つ終止連体形(口語形)のありにくさである。

結局のところ、文語形と口語形との混在は、「戦友」の場合と同様であるが、「われは湖の子さすらいの(三高琵琶湖周航の歌)」の文語形にはそれなりの理由があったと見られよう。

唱歌は、明治には文語体のものが多いが、下ると口語体のものも現れるようになる。本稿がとり挙げた例は基本的に文語体のものであるが、「戦友」および「われは湖の子さすらいの(三高琵琶湖周航の歌)」は文語体と口語体との間で揺れているものとも言える。

(二〇〇六・七・三一)

注

(1) [1958.12 岩波文庫] (1988.9 第39刷による)

(2) [上] 明治篇 [1977.10 講談社文庫]・[中] 大正・昭和篇 [1979.7 同]・[下] 学生歌・軍歌・宗教歌篇 [1982.5 同]

(3) [1997・2 世界思想社]

(4) (一)『近世文語の研究』[2003・9 東京堂出版] 附録「補助活用形容詞の機能拡大——近代文語の一問題——」(もと「専修大学人文科学研究月報」54 [1967・5])・(二)「現代短歌に見られる形容詞の用法——補助活用の本活用化——」(「専修国文」43 [1988・9])・(三)「近代短歌における和語の再生」(「日本語学」8-10 [1989・10])。『近世文語の研究』第六章「形容詞補助活用の活用形造出ならびに機能拡大」は、その標題のように「機能拡大」ともされる。

なお、前稿(一)『長塚節歌集』の形容詞(『国語語彙史の研究』24 [2005・3 和泉書院])、および、2003-2004年度科学研究費補助金基盤研究(c)研究成果報告書『文献に現れた述語形式と国語史の不整合性について』において、鈴木氏『近世文語の研究』の出版社を「武蔵野書院」としたが、右に示したように「東京堂出版」が正しい。ここに訂正するとともに、鈴木氏ならびに東京堂出版にお詫び申し上げる。

(5) 別稿(一)「形容詞の形容動詞化と形容動詞の形容詞化」(「語文」(大阪大学) 75・76 [2001・2]) 参照。別稿(二)「形容詞語幹+カ・ヤカ・ラカ」(「研究年報」(奈良女子大学) 32 [1989・3])・(三)「一十カの一形態——語基末がイ列・エ列の場合——」(「叙説」16 [1989・10])・(四)「ヤカ型語幹の構成」(「い」と「は」のは) 8 [1991・12])・(五)「カ型語幹の構成」(『国語語彙史の研究』17 [1998・8 和泉書院])・(六)「ラカ型語幹の構成」(『<sup>高橋先生
古稀記念</sup>い」と「は」のは) [1993・3 同])・(七)「ヤカ型語幹とラカ型語幹」(『国語論究』7 中古語の研究 [1998・12 明治書院])・(八)「カ・ヤカ・ラカ型語幹の語基」(『国語語彙史の研究』19 [2000・3 和泉書院]) をも参照。

(6) 前稿(二)「ケシ・カシイ・カイ」(『同志社国語学論集』[1983・5 和泉書院])・(三)「二次的ケシ型と二次的ケシ型」(『国語語彙史の研究』20 [2001・3 和泉書院]) 参照。

(7) 前稿(一)に述べたが、『長塚節歌集』においても同様である。

(8) 前稿(一)に述べた。ただ、子規の例を挙げてはいない。

(9) 他に、マッシロナ「見事に咲いた／垣根の小菊。／一つ取りたい、／真白な花を、／飯事遊びの／御馳走に。」(菊の花・二、文部省唱歌)の例が見える。マッシロナは、「白晝ヲ見テマツ白ナホドニナンゾト思デ」(史記抄)のように室町時代から例が見える。同様に、『日本唱歌集』には見えないマッシロイも、「Maxxiroi. 非常に白く(うしろ)。」(日葡辞書)のように中世末から見える。

(10) 前稿(四)「ク活用形容詞語幹を後項に持つ形容動詞語幹」(『国語語彙史の研究』21 [2002・3 和泉書院])・(五)「語幹を共通にする形容詞と

形容動詞」(『同』22 [2003.3 同])・(六)「形容詞語幹の用法——十形容詞語幹の構成の複合形状言について——」(佐藤武義氏編『萬葉集の世界とその展開』[1998.4 白帝社])

(11) 前稿(一)

(12) [2003.10 文春新書346] 十一

(13) [2005.11 和泉書院] 第二篇第一章第四節、もと「両活用形容詞からシク活用形容詞へ」(『国語語彙史の研究』14 [1994.8 同])

(14) 鈴木氏(四)「かまびすし」の活用とその意味」(『国語学』62 [1985.9])・(五)「形容詞両活用(ク活・シク活)についての覚書(前)」(『専修国文』40 [1987.1])、柳田征司氏「活用から見た抄物の語彙」(『愛媛大学教育学部紀要』Ⅱ5-1 [1973.2])をも参照。

(15) 「文学・語学」105 [1985.5]

(16) 前稿(七)「一音節語幹の形容詞」(『萬葉』178 [2001.9])・(八)「ウマシクニソとウマシキクニソ——ウマシ「シク活用」の問題から——」

(『萬葉』190 [2004.9]) 参照。

(17) 『橋本四郎論文集』萬葉集編 [1986.12 角川書店]、もと「萬葉」24 [1957.7]

(18) 「萬葉」185 [2003.9]

(19) 前稿(八)をも参照。

(20) 『日本唱歌集』によると、他に「どうぞ生きて居てくれよ」(七)ともあるが、『日本の唱歌』「下」には「どうぞ生きて居てくれよ」とあるので、これは誤植であろう。

(21) ケシ型形容詞(二次的ケシ型)の例である。ヤスラケシは、「諸人の願ふ心に近江なる安良の里の安らけくして」(栄花物語)・「ぢかたうみやすのこほりのやすらけくたひらかなれとよをおもふかな」(頭氏集六三)のように、近江の安良(栗太郡、現在地不明)・野洲(野洲郡)について用いられることがあるので、この唱歌に用いられるには必然性がある可能性がある。

(22) 『日本語史の諸相 工藤力男論考選』[1999.8 汲古書院]、もと「中世形容詞の終焉」(『論集日本文学・日本語』3 中世 [1978.6 角川書店])

(23) 『中田博士 功績記念 国語学論集』[1979.2 勉誠社]

キーワード…『日本唱歌集』 形容詞 マシロ「真白」 連体形キ（文語形） 連体形イ（口語形）

〔付記〕 本稿は、2006-2008年度科学研究費補助金（基盤研究(C)課題番号一八五二〇三五三）による研究成果の一部である。

（『国語語彙史の研究』 26 [2007・3] 掲載）

ヲ「小」とコ「小」

蜂 矢 真 郷

オホ「大」―ヲ「小」が対義語であるのに対して、オホ「大」―コ「小」も対義語であるが、ヲ「小」とコ「小」との差違や、両者の関係はどうであるだろうか。

例えば、『時代別国語大辞典上代編』では、

接頭語。名詞に冠する。^①小さい意を添え、また小さくかわいいものとして親しみをこめてもいう。(ヲ「小」の項)

接頭語。主として名詞に接するが、動詞に冠せられたものもある。^②ほぼ同義の接頭語にヲがある。(コ「小」の項)

のように、前者に「親しみをこめても」とあるが、後者にも右の後に「②親愛の気持をあらわす。」とあり、結局「ほぼ同義」であつて、後者が動詞に上接することがある他は、両者の差違ははっきりしない。

本稿は、ヲ「小」・コ「小」について（これらと対義的に用いられるオホ「大」についても）、上代・平安初期頃（平安中期初を含む）の例を中心として、それぞれ比較的古い例を挙げて見ることにしたい（ヲ「小」・コ「小」の平安初期頃の例については、「・」印を付して挙げる）。なお、「小」とのみ表記された例は、ヲと訓むかコと訓むかが確定できないので検討の対象としないことにする（「大」とのみ表記された例は、オホの他の訓はほとんど考えられないので挙げることにする）。

一

まず、ヲ「小」の例を、およそ何を表すかによって分類しつつ挙げる。

▽地形等

ヲサカ …… 朝妻の避介の小坂を（避介能鳥瑤介鳥）片泣きに道行く者も偶ひてぞ良き（仁徳紀・五〇）

ヲサト 小里なる（平佐刀奈流）花橘を引き攀ちて折らむとすれどうら若みこそ（萬三三七四・東歌）

ヲソネ 浅茅原小确を過ぎ（鳴贈祢鳴須擬）百伝ふ鐸ゆるくもよ置目来らしも（頭宗紀・八五）

ヲダニ 浅茅原小谷を過ぎて（袁陔尔袁須疑弓）百伝ふ鐸ゆるくも置目来らしも（記頭宗・一一〇）

ヲノ「小野」さねさし相模の小野に（佐賀牟能袁怒迹）燃ゆる火の火中に立ちて問ひし君はも（記景行・二四）

ヲバヤシ 小林に（鳥麼野始爾）我を引入て奸し人の面も知らず家も知らずも（皇極紀・一一一）

ヲミネ 相模嶺の小峰見隠し（平美祢見可久思）忘れ来る妹が名呼びて我を音し泣くな（萬三三六二・東歌）

ヲムレ 今城なる小山が上に（平武例我禹杯尔）雲だにも著くし立ゝば何か歎かむ（齊明紀・一一六）

ヲヤマダ 小山田の（平夜麻田乃）池の堤にさす楊なりもならずも汝と二人はも（萬三四九二・東歌）

ヲヲ …… 大峰には（意富袁尔波）幡張り立てさ小峰には（佐袁々尔波）幡張り立て……（記允恭・八九）

・ヲガハ「小川」斑鳩の富の小川の（止美能平何波乃）絶えばこそ我が大君の御名忘らえめ（上宮聖徳法王帝説）

ヲガハ「小川」の上宮聖徳法王帝説の例は、『日本古典文学大辞典』によると、この例の部分は聖徳太子伝暦の撰述以後のものとされるので、平安初期頃のものとしておいたが、この歌の上代特殊仮名遣およびヤ行エの表記は全て合っている、上代の例と見てもよいかと考えられる。なお、この例の「富の小川」は、現在の富雄川である。

右のうち、オホと対義的に用いられるものに、ヲノ「小野」・ヲヲ、および、ヲガハ「小川」があり、オホノ「大野」「面形の忘れむしだは大野ろに（於抱野呂尔）たなびく雲を見つつ偲はむ」（萬三五二〇・東歌）、オホヲ（ヲヲの例に同じ）、および、オホカハ「大川」「度会の大川の辺の（大川）邊」若久木我が久ならば妹恋ひむかも」（萬三一二七）の例がある。

また、ヲソネのソネ「磽」は、「石まじりの固いやせた土地か。」（『時代別国語大辞典上代編』）と、ヲムレのムレは、「山。朝鮮語に由来する語か。」（『同』）とされる。

▽地名

ヲサホ …… 春日の春日を過ぎ 妻隠る小佐保を過ぎ（鳴佐袁鳴須擬）……（武烈前紀・九四）

ヲツクハ 小筑波をつくはの〈平都久波乃〉繁しげき木の間まよ立たつ鳥とりの目ゆか汝を見むさ寝ねざらなくに（萬三三九六・東歌）
三四一四

・ヲクロザギ おくろをぎきみつのこじまの人ならば宮みやこのつとにいざといはましを（古今一〇九〇）

・ヲヒレ 大おほひれや〈於保比礼也〉小をひれの山やまは〈平比礼乃也末者〉や寄よりてこそ寄よりてこそ山やまは良よらなれや遠とほめ目はあれど（東遊

歌八・片降）

固有名詞の例は基本的に挙げないこととしたが、ヲ「小」に「地形等」を表す例が多いことを考慮して、地名は挙げておくことにする（比較する必要から、コ「小」の場合も同様とする）。

右のうち、オホと対義的に用いられるものに、ヲヒレがあり、オホヒレ（ヲヒレの例に同じ）の例がある。

▽人

ヲヂ「翁・伯父・叔父」 其事勝國勝神者 是伊奘諾尊之子也 亦名鹽土老翁（略）老翁此云こゝ鳥賦。（神代紀下・第九段一書第四

・第五）

ヲバ「姨・姑」 姑古記云釋親云父之姉妹爲姑（略）俗云平婆（令集解・喪葬令）

右のヲヂ・ヲバは、オホ（・オ）と対義的に用いられ、オホヂ「祖父」「祖父母」古記云（略）俗云於保知於保波（令集解・喪葬令）、オホバ「祖母」（オホヂ「祖父」の例に同じ）・オバ「祖母」「阿婆於波」（新撰字鏡）の例がある。

▽動物

ヲカモ 沖おきに住すも小鴨をかものころ（平加母乃毛己呂）やさか鳥息どりいきづく妹いもを置おきて来きぬかも（萬三五一七・東歌）
三五四八

このヲは、ヲ「男・雄」の意と見る可能性もある。

▽植物

ヲゴモ 人言ひとことの繁しげきによりてまを薦しもの（麻乎其母能）同じ枕まくらは我わはまかじやも（萬三四六四・東歌）

・ヲフフキ 近江路あふみちの篠しの々小蓀をふき（之乃々乎不々支）はや曳ひかず子持こもちち瘦やせぬらむ篠しの々小蓀をふきや（之乃々乎不々支也）さきむだちや

（催馬楽一九・近江路）

▽工作物等

ヲダテ ……木幡の道に逢はしし嬢子後手は小楯ろかも（袁旆弓呂迦母）……（記応神・四二）

ヲドコ 寸戸人のまだら衾に綿さはだ入りなましもの妹が小床に（伊毛我乎杼許尔）（萬三三五四・東歌）

ヲバシ 朝霜の御木のさ小橋（瀾概能佐鳥麼志）侍臣い渡らすも御木のさ小橋（瀾開能佐鳥麼志）（景行紀・二四）

ヲブネ「小舟」 沖辺には小舟つらくく（袁夫泥都羅々玖）くろぎやのまさづ子吾妹国へ下らす（記仁徳・五二）

ヲヤ「小屋」 葦原のしけしき小屋に（志祁志岐袁夜迹）菅置 いやさや敷きて我が二人寝し（記神武・一九）

・ヲガメ 玉垂れの小瓶を中に据ゑて（平加女乎奈加仁須恵天）主はもや魚求きに魚取りにこゆるぎの磯の若藻刈り上げに（風

俗歌三・玉垂れ

・ヲグシ 蘆の屋のなだの塩焼いとまなみ黄楊の小櫛もささず来にけり（伊勢物語、和歌）

・ヲグルマ 小車錦の（平久流末尔之本能）紐解かむ宵入を忍ばせ夫よやな我忍ばせそよまさに寝てけらしも（風俗歌八・小車）

右のうち、オホーと対義的に用いられるものに、ヲダテ・ヲバシ・ヲブネ、および、ヲグシがあり、オホタテ「皇太子請（于）天皇（

以作（大楯及鞆（推古紀十一年十一月）、オホハシ「しなでる片足羽川のさ丹塗りの大橋の上ゆ（大橋之上從）」（萬一七四二）、

オホブネ「大船」「大舟に（於保夫祢尔）ま梶しじ貫き海原を漕ぎ出て渡る月人をとこ」（萬三六一一）、および、オホグシ「いとあや

しき様なる衣をきて、大櫛を面櫛にさしかけてをりて」（大和物語）の例がある。また、ヲドコに対して、オホドコ「柳 野王曰（

（略）与郭同 和名於保止古 周（棺者也）（和名抄・廿卷本十四）の例があり、これは、「棺を納める石、または木造のはこ。」（『日本国語大辞典』

〔初版・第二版〕の意であつて、やや異なるが、合わせ挙げてよいかと見られる。なお、ヲガメの例については、第二節にコの「動

物」として挙げるコガメの例を参照されたい。

▽（程度）〔形容詞〕

・ヲグラシ 暗き夜一分には、世間幽冥にして都て見（ゆる）所无（く）して正道を迷失（し）ツ、（東大寺図書館蔵 地蔵十輪經元慶七年点・

中田祝夫氏釈文）

この例については、第二節にもふれ、第三節に述べる。

次に、コ「小」の例を、同様に分類しつつ挙げる。

▽地形等

コシマ「小嶋」 いやぜるの安是あの小松こまつに木綿垂ゆふしで、吾わを振り見みゆも安是あ小島こしまはも〈阿是古志麻波母〉（常陸国風土記・香島郡、歌謡）

・コムヂ 大宮おほみやの西にしの小路こむちに〈尔之乃己无知尔〉漢女子産あやめこむだりさ漢女子産あやめこむだり たらりやりんたなり（催馬楽四八・大宮）
右のうち、オホと対義的に用いられるものに、コムヂがあり、オホミチ「大路 唐韵云道路（略）大」和名於保美知（略）」（和名抄・十卷本三）の例がある。コムヂは、コ「小」＋ミチ「道」の撥音便ととらえられて、対義語は、オホチ「あをによし奈良の大路おほちは〈奈良能於保知波〉行き良よけどこの山道やまみちは行き悪あしかりけり」（萬三七二八）より、オホミチと見る方がよりよいことになる。

▽地名

・コイセ 伊勢いせの海うみなるやはれ小伊勢こいせの海うみなるや〈古以世乃宇見奈留也〉鯨くじらの寄よる島しまの百枝ももえの松まつの……（風俗歌三七・伊勢風俗）
・コヨロギ 小餘綾こよろぎの〈古与呂木乃〉磯立いそたてちならし磯いそならし菜摘なつめむ少女めざしぬ濡ぬらすな沖おきに居をれ居をれ波なみや……（風俗歌二・こよろぎ）

▽人

・コアコメ 田中たなかの井戸いどに光ひかれる田水葱たなぎ摘つめ摘つめ吾子女あここ小吾子女こあこ〈己安己女〉たたりらり 田中たなかの小吾子女こあこ〈太奈加乃己安己女〉（催馬楽五四・田中）

・コジウト 兄公 余雅云夫之兄曰（和名）兄公（和名）（和名抄・十卷本二）

・コジウトメ 女公 余雅云夫之姉曰（和名）女公（和名）（同）

「地名」も、「人」も、上代の例が見えないことが注意される。

▽動物

コウマ くへ越こしに麦食むぎはむ小馬こうまの〈武藝波武古宇馬能〉はつゝに相見あひし児こらしあやにかなしも（萬三五三七・東歌）

コサル 岩の上に小猿米焼く〈古佐屢渠梅野俱〉米だにも食けて通らせ羚羊の翁（皇極紀・一〇七）

コマ「駒」 ま蘇我よ蘇我の子らは馬ならば日向の駒（譬武伽能古摩）……（推古紀・一〇三）

・コガメ たまだれのこがめやいづらこよろぎの礪のなみわけおきにいでにけり（古今八七四）

「動物」のコは、コ「子（子供）」の意と見る可能性もある。

右のうち、コマ「駒」は、コ「小」＋ウマ「馬」の約まったものと見られる。また、コガメの例については、第一節にヲの「工作物等」として挙げたヲガメの例を参照されたい。

▽植物

コシバ 庭中の足羽の神に小柴刺し〈古志波佐之〉我は斎々む帰来までに（萬四三五〇・防人歌）

コスゲ「小萱」 足柄の真間の小萱の〈麻萬能古須氣乃〉萱枕 あぜかまかさむ児ろせ手枕（萬三三六九・東歌）

コナギ「子水葱」 苗代の小水葱が花を〈古奈宜我波奈乎〉衣に摺りなるるまにまにあぜかなしけ（萬三三七六・東歌）

コマツ「小松・子松」 いやぜるの安是の小松に〈阿是乃古麻都爾〉木綿垂でゝ吾を振り見ゆも安是小島はも（常陸国風土記・香

島郡、歌謡）

コヤデ 遅速も汝をこそ待ため向つ峰の椎の小枝の〈四比乃故夜提能〉逢ひは違はじ（萬三四九三・東歌）

コカヤ 走井の小萱刈り収めかけ〈己加也可利乎左女加介〉それにこそ蕪つくらせて絲引きなさめ（催馬楽七・走井）

コスガムラ 菅叢のやはれ小菅叢のや〈己須加牟良乃也〉叢のや菅叢のや生ひ出ば我こそ刈らめ（風俗歌一八・菅叢）

コセリ 大芹は〈於保世利波〉国の禁物小芹こそ〈己世利己曾〉ゆでゝも旨し……（催馬楽一五・大芹）

コタチバナ 道の辺の小橘をふさ折り持つは誰が子なるらむ（皇太神宮年中行事、歌謡）

コツヅラ 深山の小葛〈見也末乃古津々良〉繰れ繰れ小葛〈久礼々々古津々良〉（神樂歌五九・早歌）

コハギ 宮木野のもとあらのこはぎつゆをおもみ風をまつとききをこそまで（古今六九四）

コヒル 葎（略）和名古比留（本草和名十八）

・コミラ 葎（略）和名古美良（同）

・コムギ 小麦^{藁附} 周礼注云(略) 小麦^{和名古半岐} 一云末半岐 説文云麩(略) 和名古無伎乃加須(略) (和名抄・廿卷本十七)

・コヤナギ 我が門^{わかど}のや垂^{した}ら小柳^{こやなぎ} (之太留古也奈支) さはれとうとう 垂^{した}る小柳^{こやなぎ} (之太留古也奈支) 垂^{した}るかいてはなよや 垂^{した}る小柳^{こやなぎ} (之太留古也奈支) …… (風俗歌二〇・我門)

右のうち、オホと対義的に用いられるものに、コセリ・コヒル・コミラ・コムギがあり、オホセリ(コセリの例に同じ)、オホヒル(荻^荻、荻^荻於保比留)(新撰字鏡・享和本)、オホミラ「薤^薤(略)菜芝也(略)和名於保美良」(本草和名十八)、オホムギ「交易雜物ノ山城國大麥三石 小麥卅石(略)」(延喜式二十三民部下)の例がある。

また、コヤデは、「小枝^{こえだ}の東国語形。」「(時代別国語大辞典上代編)」とされ、ヤデとエダ「枝」とは母音交替と見られる。

▼身体の部分

・コオヨビ 季指^{「季指」} 儀礼云——古於与比 野王案小指第五指也(和名抄・十卷本二)

・コクビ ……袂^{たもと}よく着^きよく肩^{かた}よく 小頸^{こくび}安^{やす}らに(己久比也須良尔) 汝^{ましき}着^きせめかも(催馬楽四・夏引)

・コツノ 牛角鰓^鰓(略) 和名宇之乃古都乃(本草和名十五)

右のうち、オホと対義的に用いられるものに、コオヨビ・コクビがあり、オホオヨビ「拇^{「拇」} 國語注云——(略) 於保於与比 太指也」(和名抄・十卷本二)、オホクビ「衽^衽 四聲字苑云——(略) 於保久比 衣前襟也」(和名抄・廿卷本十二)の例がある。コオヨビのコは、対義語オホオヨビにより、コ「子(子供)」ではなくコ「小」と見られる。

この「身体の部分」を表すものには、上代の例が見えないことが注意され、ヲ「小」の例が見えないことが特に注意される。

▽工作物等

コスズ 宮人^{みやひと}の足結^{あゆひ}の小鈴^{こすず} (阿由比能古須受) 落^おちにきと宮人^{みやひと}響^{ひび}む里人^{さとびと}もゆめ(記允恭・八二)

コブスマ 庭^{には}に立つ^た麻手小衾^{あさで こぶすま} (安佐提古夫須麻) 今夜^{こよひ}だに妻^{つま}寄^よしこせね麻手小衾^{あさで こぶすま} (安佐提古夫須麻) (萬三四五四・東歌)

・コカナヘ 鍍^鍍(略) 比良加奈戸 又古加奈戸 (新撰字鏡)

・コキヌ 裱^裱(略) 小襦也 短支古支奴 (同)

・ココロモ 襖^襖(略) 袍也 古己呂毛 (同)

・コハカマ 校(略) 小袴 古波加万 又波く支(同)

・コヒツ 山崎やまざきの小櫃こひつの絵えも、まがりのおほぢの像かたもかはらざりけり(土左日記)

・コヘ 小家こへのかどの端出しりくべ之繩なほの鯰なよしのかしら、柎ひいぎら、いかにぞ(同)

・コモタヒ 靨(略) 瓦器也 古毛太比(略) (新撰字鏡・享和本)

・コヤ 助鋪 辨色立成云助鋪和名古夜 一云比多岐夜 如三衛土屋三也(和名抄・十卷本三)

コヘは、コ「小」十イヘ「家」の約まつたものと見られる。

▼〈程度〔動詞〕〉

コダカル 大和やまとのこの高市たけちに 小高こだかる 〈古陋加流〉市いちの高処つかさ……(記雄略・一〇〇〇)

・コカヘル 浜淪(略) 波浪進退也 前却之兒 佐加万支余奈我留く水乃古加戸留曾 (新撰字鏡・享和本)

▽〈程度〔形容詞〕〉

・コサヤケシ ……月つきの面おもをさ渡わたる雲くものまさやけく見るみこさやけく見るみ 〈古佐也介久三流〉(風俗歌八・小車)

▼〈程度〔名詞〕〉

・コカゼ 微風 崔豹古今注云柳微風大揺微風此間云古賀世 (和名抄・十卷本二)

・コサメ 「小雨・霽」 少細降雨故〔雨降〕 〈少細二合古佐女〉(靈異記・上三・興福寺本)

・コヒヂ 泥 孫愔曰泥(略) 和〔名〕比知利古 一云古比地 土和〔名〕水也 (和名抄・十卷本二)

右のうち、オホと対義的に用いられるものにコカゼがあり、オホカゼ「辛酉 大風」(皇極紀二年正月)の例がある。

「程度」を表すものは、「動詞」「形容詞」「名詞」を括つて見る場合に、ヲグラシを除いて、ヲ「小」の例が見えないことが特に注意される。

三

右に挙げてきた例を見ると、「地形等」は、ヲが上代10、平安初期頃1例、コが上代1、平安初期頃1例、「地名」は、ヲが上代2、

平安初期頃2例、コが平安初期頃2例、「人」は、ヲが上代2例、コが平安初期頃3例、「動物」は、ヲが上代1例、コが上代3、平安初期頃1例、「植物」は、ヲが上代1、平安初期頃1例、コが上代5、平安初期頃10例、「身体の部分」は、ヲなし、コが平安初期頃3例、「工作物等」は、ヲが上代5、平安初期頃3例、コが上代2、平安初期頃8例、「程度」「動詞」は、ヲなし、コが上代1、平安初期頃1例、「同」「形容詞」は、ヲが平安初期頃1例、コが平安初期頃1例、「同」「名詞」は、ヲなし、コが平安初期頃3例、のようである。

これらから見ると、本来ヲが用いられるものは、「地形等」「地名」「人」「工作物等」である。このうち、「地形等」はコシマ（常陸国風土記・香島郡）・コムチ（催馬楽四八・大宮）を除いて基本的にヲが用いられている。「人」は、ヲが平安初期頃になく、コが上代にないことから見て、「地名」も、コが上代にないことから見て、「工作物等」も、上代ではヲの方が多く、平安初期頃ではコの方が多いところから見て、ヲからコへの変化と見られる。

また、上代の例が見えないので本来コであるかどうかは断定できないが、一般的にコが用いられるものは、「身体の部分」と、大きく括った「程度」であり、このうち、「程度」「形容詞」のヲグラシ（地蔵十輪経元慶七年点）のみが例外となる。

残る「動物」「植物」を含めて、全体としては、上代から平安初期頃にかけて、ヲからコに変化すると言える。そして、「地形等」にヲが多く用いられ、また、「身体の部分」にコが用いられ、「程度」に基本的にコが用いられるのは、それぞれの特徴と言ってよいであろう。

ヲ「小」とコ「小」との両方の例があるものを見ると、

ヲヤ「小屋」（記神武・一九）↓コヤ（和名抄・十卷本三）

ヲブネ（記仁徳・五二）↓コブネ「川^{かは}のあなたよりおかしき小舟^{こぶね}、興^{けう}あるさまに調^{てう}じて造^{つく}り」（宇津保物語・祭の使）

ヲグラシ（地蔵十輪経元慶七年点）↓コグラシ「小暗」「こぐらくなりぬれば、鵜舟^{うぶね}どん、かざり火さしともしつゝ」（蜻蛉日記）

ヲガメ「小瓶」（風俗歌三・玉垂れ）↓コガメ「小亀」（古今八七四）

のようである。コブネ・コグラシ「小暗」の例は、先に例を挙げた範囲に入らないので、改めて例を挙げたものである。また、ヲガメ「小瓶」・コガメ「小亀」の例は、風俗歌のヲの例を基に古今和歌集のコの例が作られたと見られるが、合わせてカメ「瓶」がカメ

「亀」に詠み変えられたととらえられる。^(追記)

以上のように、全体的には、ヲ「小」からコ「小」へと変化する方向であると見られる。すなわち、オホ「大」の対義語は、本来、ヲ「小」であつたものが、上代から平安初期頃にかけて、コ「小」へと変化して行つたととらえられる。

ところで、「程度」の、例外となるヲグラシは、「山の方、小暗う、何のあやめも見えぬに」(源氏物語・宿木)などの例も見えて、漢文訓読特有語とは見られない。例外となる理由は、

コグラシ「木暗」ほとゝぎすまたとふべくもかたらはでかへる山路のこぐらかりけん(蜻蛉日記、和歌) 荒れたる門の忍ぶ草、
繁りて見上げられたる、たとしへなく、木ぐらし(源氏物語・夕顔)

の例があることにより、それとの混同を避け、程度が小さいことを明示するのに、コグラシ「小暗」のみならず、ヲグラシの形態でも用いられたからかとも考えられる。尤も、ヲグラシの例が、コグラシ「小暗」・コグラシ「木暗」の例よりも古くに見えるので、このように考えるのが適切ではないこともあり得よう。

また、「小倉山(やま)」などにかけての用法が目につく。『角川古語大辞典』ヲグラシ「小暗」の項とあるように、ヲグラヤマと掛詞として用いられることの多いことが、ヲグラシが例外的に用いられる理由である可能性も考えられる。ただ、これも訓点資料のヲグラシの例について言えることではないと見られる。

なお、コグラシ「小暗」・コグラシ「木暗」の例が上代(平安初期)にあるならば、前者はコ甲類、後者はコ乙類であつて、上代特殊仮名遣の甲乙の差があるところであるが、いずれの例も平安中期以降のものであることが注意されよう。

さて、木村紀子氏『古層日本語の融合構造』は、

「小」の意味のオ(↑ヲ)とコの混在並用は、日本の文献言語の最も古い時代、いわゆる古代歌謡群に万葉仮名で明記されて、その頃からすでにあつたことである。とくに記紀歌謡では、用例がコよりもヲに片よつて、「オホ野・ヲ野」「オホ峰・さヲ峰」「オホ前・ヲ前宿祢」と、オホと対で用いられてもいる。オケ・ヲケという兄弟皇子名(後の仁賢・顕宗)もあるから、明らかにそれはオ(大)・ヲ(小)の対で、口の開きの大小に応じた声の大小が、直接意味となつたものだとしてとれる。記紀歌謡ではコがオホと対になつて用いられる例はなく、「ヲ谷・ヲ屋・ヲ坂・ヲ林」と、後世の姓などではむしろコの方が一般的な語もヲとし

て出ている。

それに対して、神楽・催馬楽・風俗という伝承歌謡群では、コを用例の方が多く見られる。奈良の京みやこの今様だった催馬楽では、「ヲ舟・オホ舟」という対語も出るが、「オホ芹せり・コ芹せり」・「オホ路ち」・「コ（ム）路ち」というオホ（大）とコ（小）の対応もある。全般的にコは「コ萱すげ・コ萱かや・コ葛つづら・コ松・コ柳」と、草木などにつく場合が多いようであるが、「ヲ落ふふき」（催馬楽）というのもあつて、たまたま文字に残されたわずかな例だけから一概に言ってしまうことはできない。

古来のヲ（↓オ）とコの例を、オホ（大）との対応も踏まえながら眺めるとオホとヲの密接な対応に、別系統のコが入りこんで力を得、ヲは熟語の中でのみ残ったのだと思われる。

と述べられる。ここに「口の開きの大小に応じた声の大小が、直接意味となった」とされる解釈には異論もあろうし、それに、コ「小」もまた「熟語の中で」用いられているという問題点もあるが、氏が結論的に述べられるように、オホ「大」と対義的に用いられるものは、ヲ「小」が本来であり、後に「別系統の」コ「小」が用いられるようになり、新しいコ「小」が勢力を持つようになったのは確かであろう。

四

前稿「上代特殊仮名遣に関わる語彙」⁽⁶⁾において、男を表すものが、ヲトコ「男・丈夫」「言こと」阿那迺夜志 愛袁登古袁（記神代）・ヒコ「彦」「宇沙都比古」（記神武）などに見えるコ「子（男）」など（「コ」と、ヲ「男」「男はなし（遠波那志）……」（記神代・五）（「ヲ」との二類があることについて、その二類の発生は、上代において、コ「子」における男の意の「子（男）」と子供の意の「子（子供）」とが分化して、コは子供の意の方に傾向するようになり、そして、男の意を表すものとして新たにヲが用いられるようになった結果ではないか、と推定した。

このように、男を表すものがコ「子（男）」からヲ「男」へと変化したかと思えたが、その変化に伴い、恐らくは少し遅れて、小さい意を表すものがヲ「小」からコ「小」へと変化したかと思えられる。別の形で言えば、コは、男の意が中心であるところから子供の意が中心である方へ、ヲは、小さい意が中心であるところから男の意が中心である方へ、それぞれ変化したかと思えられる。つまり、

コが、男の意も子供の意もともに表す、ないしは、ヲが、小さい意も男の意もともに表す、というのはわかりにくいので、何らかの形で分担するのは当然の方向であろう。コ「子（子供）」とコ「小」とは直ちに同じではないが、子供は小さいので、コが子供を含む小さいものを表す方向に変化することは十分考えられることである。

これを図示すると、次のようである。

意味 形態	コ	ヲ
男の意 + 子供の意	コ「子（男・子供）」	
小さい意	コ「小」	ヲ「小」

右の、コで囲んだ部分が本来のものと見られ、太字の部分が新しいものと見られる。

なお、第一節において、「動物」のヲカモの例について、「このヲは、ヲ「男・雄」の意と見る可能性もある。」と、また、第二節において、「動物」のコウマ・コサル・コマ「駒」、および、コガメの例について、「動物」のコは、コ「子（子供）」の意と見る可能性もある。」と述べたが、これらのことは、ヲが小さい意とも（男・）雄の意とも見られ、コが小さい意とも子供の意とも見られることを表している。

因みに、類聚名義抄に見える、ヲ「男・雄」・ヲ「小」、コ「子（子供）」・コ「小」のアクセントを見ると、次のようである。

ヲ「男・雄」〔上声〕…男ヲ（上）（観仏中一一一〔57オ〕）、〔童〕男平乃和良波（上上上上平）（図一二六）、雄雄ヲドリ（上平平）（観僧中一二三〔68オ〕）

ヲ「小」〔上声〕…舅母方ノヲヂ（平平平上上）（観僧下六八〔35ウ〕）、姨ヲハ（上上）（高59ウ）、艇ヲフネ（上上〇）（観仏下本一〔2オ〕）

コ「子（子供）」〔上声〕…子コ（上）（観法下一三七〔70オ〕）、産生コウム（上上平）（図一二四）

コ「小」〔上声〕…微^{〔風〕}―コカゼ（上平平）（観僧下五一「27才」、小^{〔麦〕}―コムギ（上平平）（高38才）
いずれも、上声と見られるので、右に見てきたヲとコとの変化はありやすかったと考えられる。

五

また、時代が大きく下るが、近代の詩に、それまでには見えないヲ「小」の例が見出だされるので、次に挙げておきたい。

ヲガヒ「小貝」小貝の色にも、枯葉のさゝやきにも／ゆたかにこもれる無聲の愛の響。（石川啄木「あこがれ」沈める鐘^二）わが世は空洞^{うつろ}の實なし小貝、（薄田泣菫「二十五絃」五月の一夜^四）

ヲグロミヅ「小黒水」五月野の濡跡^{ぬれと}道／深沼の小黒水（伊良子清白「孔雀船」五月野）

ヲブエ「小笛」春の日小野の／逍遙^{せうそう}に、／ふるき小笛の／拾ひきて、（薄田泣菫「暮笛集」兄と妹^{みなみ}）南の花の香^かか／浪ひびく夢の小笛か（蒲原有明「草わかば」君やわれや）

これらは、全体としてコ「小」よりヲ「小」の方がより古いことにより、古語的ないし上代語的に表現しようとして、ヲ「小」を用いたものかと考えられる。擬古的表現であるが、中古語を目指したと言うより、むしろ上代語を目指したものと見えよう。

（二〇〇七・八・二六）

注

- （1）後に第一節に挙げるように、平安初期には形容詞に上接する例も見える。
- （2）後に第二節に挙げるように、平安初期頃には形容詞に上接する例も見える。
- （3）ヲヤ「小屋」の古事記歌謡の例の傍点部「志」は、真福寺本によった。他の諸本に「去」とあることによる種々の問題があるが、それについては別稿「語の変容と類推——語形成における変形について——」（『国語語彙史の研究』27〔2008・3 和泉書院〕）にふれる。
- （4）後に注（6）に挙げる前稿、参照。
- （5）〔2003・3 平凡社〕緒言

(6) 「萬葉」 198 [2007・7] 第一節「男と女」

(7) イザナキ「次伊」^{【思】} 那岐 次妹伊耶那美神^{此二神名亦以音如上}「(記神代)、カムロキ」「皇睦神漏伎神漏美乃命」(祝詞・祈年祭)などのキ、ヨグナ「亦名日本童男^{童男此云鳥貝奈}」(景行紀二年三月)のグ

キーワード…ヲ「小」コ「小」ヲ「男・雄」コ「子」オホ「大」

〔付記〕 本稿、とりわけ第五節は、二〇〇六―二〇〇七年度科学研究費補助金(基盤研究(c)課題番号一八二〇三五三)による研究成果の一部である。

〔國學院雜誌〕 108-11 [2007・11] 掲載)

〔追記〕 「朝日新聞」[2008.2.18]の文化欄の、「朝日歌壇 番外地でニヤリ 佐佐木幸綱さん案内」に、

朝日歌壇が、入選は逃したけれど驚きや笑いの魅力に富む投稿歌を、ただ没にするのは惜しいと保存し始めて1年。そんな歌群を選者を代表して佐佐木幸綱さんが紹介する。

として、

・砂漠行く駱駝^{らくだ}に結ぶ金銀の亀の運命^{さだめ}を泣きし幼な日／上田由美子／そういえば「月の砂漠^{さばく}」に、「二つの甕^{かめ}はそれぞれに、紐^{ひも}で結んでありました」という一節があった。亀が駱駝にしばらくつれられて砂漠に行くイメージだ。「兎美味^{うさぎおい}しかの山」のたぐいである。なんともシュールである。なんともおかしい。

とあるのを見つけた。

語の変容と類推

——語形成における変形について——

蜂 矢 真 郷

阪倉篤義氏『語構成の研究^(注)』は、「定義的な言ひかたをすれば、語構成といふのは、一言語において、「語」といふ単位が構成されるその方式 (pattern) を考究する、言語研究の一分野である。」とされて、語形成と語構造との二つの立場から「語根創造」「借用」「変形」「合成」という方式について検討され、その中心の課題は「合成」「複合」「派生」であるとして、考察を進められる。

ところで、その語形成(造語)の方式としての「変形」について、氏は、次のように述べられる。

「造語」といふことの中心をなすものは、やはり、当の言語体系内にすでに存在する形式(略)にもとづき、あるいはまた、これを利用して、あたらしい記号を創造する方法である。もつとも、そのなかには、かならずしも意図的な新造語とはいひにくく、音韻の転倒・脱落・縮約・同化・添加などによつて、新形がうまれでたと見るべきものはおほい。(略)これらはやはり、つぎに言ふ合成法と併用されることがおほいのである。

右の引用のうち、「もつとも」より前の部分は、「変形」だけではなく「合成」についてのことでもある。

この語形成における「変形」について、「音韻の転倒・脱落・縮約・同化・添加など」という形態的分類とは別に、語の「変形」の様相がどのようなものであるか、いくらかの例を基にして考えることにしたい。

一

よく知られている例であるが、萬葉集に見えるナツマスゴ・ヤマダモラスゴが、ナツムスゴ・ヤマダモルスゴと訓まれて、スゴとい

う語が作られたことがある。

籠^(こ)もよみ籠^(こ)持ち ふくしもよみぶくし持ち この岡に菜摘ます兒^(こ) 〈菜採須兒〉…… (萬一) あしひきの山の常陰^(とかげ)に鳴く鹿の声聞かすやも 〈聞為八方〉 山田守らす兒^(こ) 〈山田守酢兒〉 (萬二二五六)

このツマス・モラスは、そのスが上代に見える尊敬の助動詞「四段活用」で、ツム「摘」＋ス、モル「守」＋スと見られ、仮名書き例のタタス・カヨハス「…さ婚^{よは}ひに在^あり立^たし」〈阿理多^あく斯〉婚^{よは}ひに在^あり通^{かよ}はせ〈阿理加用婆勢〉… (記神代・二) がタツ「立」＋ス、カヨフ「通」＋スと見られるのと同様である。中古以降、そのスが通常には用いられなくなり、その結果、異なる訓がなされるようになったと見られる。

こけごろもち ふぐしもよみふぐしもて このをかになつむすこがいへさけ (夫木一五五五九) あし引の山のとかげになくしかの声ききつやも山田もるすこ (夫木四五九五)

先の萬葉集の二例は、夫木和歌抄では右のようであり、ナツムスゴ・ヤマダモルスゴになる他、同様のキカスもキキツになっている。また、次のように、萬葉集を承けて、およそ鎌倉時代以降にはスゴが用いられている。

十三番 秋田 左持^{さもち}／やまだもるすこがなるこにかぜふれてたゆむねぶりをおどろかすなり 有家／右／吹くをりはなるこのおともたえせねば風のもりけるやまだなりけり 経家／(略) 判云、左歌、たゆむねぶりをおどろかすといへるすがた心、すごとはおぼえず、老翁などのもりけるにや (略) すこがねぶりまさりたるにや 持と申すべきにや (六百番歌合二八五・三八六) を山田のすごがなるこに風過ぎてほなみにさわぐむらすずめかな (正治初度百首一〇九四) なきすててしかはつれなき山おろしにすごがおどろくひたのおとかな (千五百番歌合一二三七) すこがもる山田のなるこ風ふけばおのが夢をやおどろかすらん (拾遺愚草員外七六五) まばらなる田いほにすこがいをやすみ月にもらしていくよあかしつ (夫木一四三五一)

また、萬葉集のスゴについては、次のように、「野人」「賤女」「賤しきもの」「賤民」などの意とされてきた。

スゴトイフハ、野人。今歌ノ意者、義^{カチ}諧^{ヘリ}ニ賤^ニ女^{スゴ}。凡^ニ子^{スゴ}ト者、通^ニ男^{スゴ}女^{スゴ}。シカレトモ、今哥ノ意女子ニアヒアタレリ。(仙覚『萬葉集註釈』一、萬葉集叢書8) すこ 賤しきものゝ名也 山田守すこ共いへり (下河辺長流『萬葉抄管見』一、校本萬葉集17) すこ

萬葉集に菜つむ須兒とも山田もる酢兒とも見えたり 賤民をいへり 男女に通する名成るべし (『和訓栞』 Sugo スゴ n. A boy,

Lad — of lower classes : — *na isumu* —, a lad who gathers greens. (『和英語林集成』[第三版])

現在のように、ナツマスコ・ヤマダモラスコと訓むことは、本居宣長が

なつむすこと訓るは誤也、なつますこと訓へし、つますは、十七卷^{七十一}に、をとめらが、わかな都麻須等^{ツマスト}云々、とある^(注2)と同しくて、つむを延たる詞也、十卷^{四十}山田守酢兒、是ももるすこと訓るは誤にて、もらすこ也、すへてすこといふ稱はなき事也、(『萬葉集

玉小琴』一、本居宣長全集6)

とする辺りからのものであるが、先に挙げた『和英語林集成』[第三版]のように、さらに下つてもその訓が一般化するには至っていない。なお、『大言海』スゴ「素子」の項に「賤子ノ約、飾ナキ子ノ義力」とあるところには、萬葉集の例はなく、鎌倉時代以降の例のみが挙げられている。現在では、次のようにとらえられている。

《萬葉集卷頭の「菜摘須兒^(なつま)」や二二五六の「山田守酢兒^(やまたも)」などを、ナツムスゴ・ヤマダモルスゴと誤読したところから生れた歌語》卑しい者。賤^(し)。」(『岩波古語辞典』スゴ「素子」の項)

右のように、スゴは、誤読による曲解によって作られたものと言える。

次に、古事記歌謡に見えるシケシキであるが、近世にシゲケキとして用いられた、すなわち、きたない意と見られるシケシ「穢・蕪」[シク活用]が、繁^{あしはら}っている意のシゲケシ「繁」[ク活用]として用いられたと見られる。

葦原のしけしき小屋^{をや}に(志祁志岐^{しき}衰夜^{あしはら}迹) 萱^{すがたみ}萱^{あしはら}い^{あしはら}や^{あしはら}さ^{あしはら}や^{あしはら}敷^{あしはら}きて我^わが^{あしはら}二^{あしはら}人^{あしはら}寝^{あしはら}し(記神武・一九) 蕪^{穢也}荒^{荒也}也^{志介志} (新撰字鏡)

右の古事記歌謡の例のシケシキと訓まれる傍点部「志」(真福寺本)は、他の諸本では「去」とありシケ^シキと訓まれる。現在では、次のように真福寺本によるのがよいとされ、「去」は「志」の誤写ととらえられている。

従来「志祁去岐」の本文により、シケコキと訓まれていたが、「去」は古事記で音仮名に用いられた例がなく、意味も解釈できないので、真福寺本「志祁志岐」を採る。(『時代別国語大辞典上代編』シケシ「穢・蕪」の項の「考」) 孤例のうえ、古事記中には、「去」字を音仮名に用いた例がないので、真福寺本の「シケシキ(志祁志岐)」によるのが今の通説。「しけこき」を「しげ(繁)こき」とみる説もあるが、シゲのゲは乙類の仮名だから当たらない。「志祁志岐」を「志祁去岐」と誤写したものとみるのが妥当である。(『古語大辞典』シケコシの項、「語誌」欄〔慶野正次氏執筆〕)

他方で、近世には、鈴木丹士郎氏(一)『近世文語の研究』^(注3)が指摘されるように、シゲケシと見られる例が見える。

もとより葦原のしけき小屋におひ出てひちりこにそみたるあやしのこと草は(藤簾冊子序、上田秋成全集10、序は「生島の叟」……いつしかも年のへぬれば篠原^{しめはら}のしけき小屋^をに夜もすがら八束^{やつか}の髯^{ひげ}をかいなでておはすらむかもこの月ころは『良寛歌集』一二二三、東洋文庫556)

ここに、古事記の例が、本文「志祁去岐」によりどのようにとらえられたかを見ると、次のようである。

志祁去岐袁夜迹^{繁小屋ニ也、シゲコキハ、去ト}、『厚顔抄』、契沖全集7) 祁^(口傍書)祁ハ清音の字也、こハ字の違か、又繁き意にハあらぬか、

定りならず、(『古事記頭書』中、賀茂真淵全集17) 志祁去岐^(略)『賀茂真淵書入古事記』、同26) 志祁去岐袁夜迹^{シゲコキヲヤニ}は醜小屋^{シゲコキヲヤ}になり、

(略)【(略) 此志祁去岐を、契沖も師も繁^{シゲ}きなりと云れつるは、葦原の繁き中にある小屋と云意なるべけれど、(略)】」(『古事記伝』二十、本居宣長全集10)

契沖は、「繁小屋」とし、シゲケキの母音交替シゲコキと見ており、賀茂真淵は、『古事記頭書』で「祁」が清音仮名であることから疑問を示しているが、他では「繁」と書き入れており「繁き意」と見ているようでもある。それに対して、宣長は、契沖や真淵の説とは異なり、シコ「醜」とともにとらえようとしている。^(注4)

鈴木氏(一)は、藤簾冊子序、良寛の例について、次のように述べられる。

「繁し」と結び付けて考えていた可能性も捨てきれない。今この考え方に立つと「しげけし」であって、(略)「しげし」のク語法「しげけく」に基づいてつくられた語ということになる。

氏は、古事記歌謡、藤簾冊子序、良寛の例の他に、古事記伝の記述も挙げられるが、古事記伝にふれられる契沖や真淵の記述は確認されていないようである。契沖や真淵の記述を見ると、藤簾冊子序、良寛の例が「繁し」と結び付けて考えていた可能性」は十分にあると言える。なお、「ク語法「しげけく」に基づいてつくられた語」については、後に第四節にふれる。

右のように、シゲケキは、誤写による曲解によって作られたものと言える。

次に、古事記などに見えるコロロクであるが、下ってトロロク・トロログとして用いられる。

宇士多加礼許呂々岐豆^{此十字以音}(記神代) 失聲^{附嘶咽} 食療經云(略) 失聲嘶咽^{師説 失声 比古恵 嘶咽 古路々久} (和名抄・十卷本二) 嘶^{(略) イ}

バユ 俗云イナ、ク馬イナ、クヒ、ラクコロ、ク悲声 斯言サヘツルカヒノ音也 (名義抄)

右の古事記の例は真福寺本によったが、「許呂々岐豆」(道果本)、「許呂々岐豆」(道祥本・春瑜本)、「許呂々岐豆」(卜部兼永本・前田本・猪熊本、寛永板本は「、」なし)、「斗斗呂岐氏」(延佳本)、「斗呂呂岐豆」(本居宣長『訂正古訓古事記』)のようで、訓がコロロクからトロログに変化して行く経緯が見えるようである。^(注5)

古事記のコロロクは、現在でも、「ころころ」と鳴る。「ころころ」と音をたてる。『時代別国語大辞典上代編』、「声がしわがれて、ころころ鳴る。」「(岩波古語辞典)」、「コロコロと転がりうごめいている様子をいうととりたひ。」(新編日本古典文学全集『古事記』、頭注)のように、意味が必ずしも確定していない状況である。

宣長は、トロログと訓み、「言は斗呂祁豆と云に同じ」(『古事記伝』六、本居宣長全集9)と解していて、それを承けてか、近代にはとろける意のトロロク・トロログの例が見える。

とろくニ同ジ。『言海』トロロク「盪」の項、『大言海』も同様。^(注6) はた、大河の饅え濁る、河岸のまぢかを／ぎちぎちと病ましげにとろろぎめぐる／灰色黄ばむ小蒸汽の温るく、まぶしく、／またゆるく／とろろぎ噴く湯気(北原白秋『邪宗門』暮春、一九〇八「明治四二」年三月作)

右に挙げたことの多くについて、既に、トロログは次のようであると述べられている。

古事記が基となり誤って生まれた動詞である。(略)白秋もとろける意に用いていると思われる。(略)コロロクの意味が不明になり、とろける意と理解しようとしたために「許」の訓が発生した可能性が考えられる。(抄注・北原白秋第一詩集『邪宗門』語彙)^(注7)

右のように、トロロクないしトロログは、コロロクの意味不明による曲解によって作られたものと言える。

次に、祝詞に見えるフトシキタツが、室町時代以降フトシクタツとして用いられ、フトシ「シク活用」が成立する。このことについては、別稿(一)「動詞表記「敷」と形容詞語尾表記「敷」との間——シク活用形容詞フトシ「太」の成立について——」^(注8)に、鈴木氏(二)「芭蕉の解釈文法」^(注9)を参照の上で述べたので、簡略に示すことにする。

度會乃宇治 五十鈴川上^{ノイヌ}大官柱太敷立^宮 高天原千木高知^豆 (祝詞・伊勢大神宮 四月神衣祭「九条本」) 下津磐根^ル宮柱太敷立^高

天原千木高知^三」(同・鎮御魂斎戸祭)

これらは動詞フトシク・タカシルが並列的に用いられる例で、ク活用形容詞語幹タカ「高」・ヒロ「広」・フト「太」が、治める意のシク「敷」・シル「知」を伴うものである。通常、フトシクは宮柱について用いられる。

七種の中に鏡の宮ばしらふとしくたてていはふけふかな(松下集一〇二二) 有難や五十鈴の清き宮柱、太しく立ちて秋津洲の、
神の御稜威^(みいつ)は(謡曲・内外詣) 早朝塩がまの明神に詣(づ)。國守再興せられて、宮柱ふとしく彩椽^(さいてん)きらびやかに(奥の細道)

別稿^(一)に見たが、フトシ「シク活用」は、室町時代、正広(正徹の弟子)の松下集から見えて、その成立はシキの表記「敷」がシクとも訓まれることによると見られる。なお、鈴木氏^(二)は、謡曲・内外詣、奥の細道の例、フトシカス(萬四五)・フトシキマス(萬三六)・フトシリタツ(萬四四六五)の例を挙げられるが、祝詞の例は挙げられない。また、別稿^(一)の後、次のような例を見出したので挙げておくことにする。

意乃儘仁 梁高久 柱太^{志久} 御屋^{平營美造}留得^留 (西岡常一氏「三蔵院絵殿上棟祝詞」〔昭和^{注10}五十六拾年十二月八日〕)

この節に見てきたものは、誤読や誤写や意味不明のように変形の原因が個別的で、曲解によるものと言える。

二

形容詞ウマシの語幹の用法に関する例をいくつか挙げる。

まず、日本書紀歌謡に見えるウマヒト^{うまひと}が、昭和戦前にウマシビトの形で用いられた例がある。

……貴人^{うまひと}は(宇摩比等破) 貴人^{うまひと}どちや(于摩譬菩奴知野)……(神功紀・二八)

あの圓滿^{うま}し人が、どうしてこんな顔つきになるだらう、と思はれる表情をすることがある。(折口信夫「死者の書」^八、折口信夫

全集24、初出は「日本評論」第14巻1・3号「一九三九〔昭和^{注11}一四〕年一〔三月〕」

次に、日本書紀歌謡などに見えるウマサケが、昭和戦前にウマシサケの形で用いられた例がある。

味酒^{うまさけ}(宇磨佐開) 三輪^{みわ}の殿^{との}、朝戸^{あさと}にも出でて行^ゆかな三輪^{みわ}の殿戸^{とのと}を(崇神紀・一六、枕詞)

うつそみの腸^{はらわた}に染^しむうまし酒焼酎^{さけ}を盛^もるぎやまんぞこれ(吉井勇『天彦』「一九三九〔昭和^{注12}一四〕年一〇月 甲鳥書林」海南閑吟^{あぐら}

酒、定本吉井勇全集2、一九三八―三九（昭和二三―二四）年頃詠）

また、現代では、咲元酒造〔沖縄県那覇市首里〕製造の泡盛に「美酒（うましさけ）」がある。^{（注12）}

今一つ、日本書紀や萬葉集に見える美しい、結構である意のウマシクニが、味がよい意に用いられる例がある。

時天照大神 誨^{（三）}倭姫命^{（三）}曰 是神風伊勢國 則常世之浪重浪歸國也 傍國可怜國也 欲^{（三）}居^{（三）}是國^{（三）}（垂仁紀二十五年三月）……う

まし国そ（可怜國曾）あきづ島大和の国は（萬二）

日本書紀の「可怜國也」はウマシクニナリと訓まれるが、これは、訓注「可怜此云^{（三）}于麻師^{（三）}」汀此云^{（三）}波麻^{（三）}」（神代紀下・第十段本書）により「可怜小汀」がウマシヲバマと訓まれることによる。^{（注13）}萬葉集の例については、山口佳紀氏『萬葉集』における「非単独母音性の字余り句」について^{（注14）}が、「うましき世に」（竹取物語）の例を参照してウマシクニソと訓む説を述べられるが、これに対して、別稿^{（二）}「ウマシクニソとウマシクニソ——ウマシ「シク活用」の問題から——」^{（注15）}で、通常のようにウマシクニソと訓む方がよいと述べたことがある。

二〇〇七年三月二〇日、宮城県が観光キャンペーンに「美味し国 伊達な旅」というキャッチフレーズを使うことに対して、日本書紀を承けて二〇〇五年から「美し国、まいろう。伊勢・鳥羽・志摩」というそれを使っていた三重県が抗議したことがあった。^{（注16）}この「美味し国」（宮城県）が問題である。

ウマシについて、林浩恵氏「形容詞語幹の用法の違例」^{（注17）}は、橋本四郎氏「うまし」^{（注18）}をも参照の上、

「ウマ酒」「ウマ寝」は味覚や睡眠に関するもので、いずれも感覚的意味である。「ウマ人」は貴人の意で、身分の高さを客観的に述べる状態の意味と考えられる。もともと、身分の高さに対する評価的意味を持つ可能性も否定はできないであろう。（略）「ウマシ国」「ウマシ阿斯訶備比古遲神」「ウマシ麻遲命」は国や神に対して用いられており、美称的なものである。そこには対象への評価・感情という主観的判断が入っていると考えられる。「ウマシ小汀」も海宮へ繋がるものであつて、美称と見ることは不可能ではあるまい。

とされて、ウマシは「状態・感覚的意味を表す」、ウマシは「対象への評価・感情的意味を表す」とされる。

さて、「死者の書」^{十四}には「貴人はうまんどち、」「おなじ貴人ぢや。」「うま人たちの末々の様が、」と、「同」^{十五}には「この貴人」^{ウマレト}

家の者にも」とあるので、「同」ハのウマシビトの例は美称として意図的な表現かとも思われる。ここに、林氏が「身分の高さに対する評価の意味を持つ可能性」を考えられることが参照される。

ウマシサケは、ウマシが味がよい意であるにも拘わらず、美しい、結構である意のウマシクニ・ウマシアシカビヒコチ神・ウマシマヂ命・ウマシヨバマと同様の形態をとったものと見られ、誤用と言える。

「美味^{うま}し国」は、現代語の形容詞ウマイが味がよい意に用いられ、美しい、結構である意には用いられないことから、美しい、結構である意のウマシクニの形態のまま味がよい意に用いたものと見られて、誤用と言える。

ウマシサケ・ウマシクニ「美味」は、変形の理由が類型的であるが、誤用と言えるものであり、ウマシビトは、類型的な面もあるが、これらと異なり個別的な理由もあるものと見られる。

三

次に挙げるものは、基本的に類推によると見られ、変形の理由が類型的であるものである。

田子の浦ゆうち出でて見ればま白にそ〈真白^三衣〉富士の高嶺に雪は降りける(萬三一八) 矢形尾の真白^{ましろ}の鷹を〈麻之路能鷹乎〉やどにする搔^かき撫^なで見つつ飼はくし良^よしも(萬四一五五) ^{四七九}Maxxiroi. 非常に白^{しろ}い(一と)。(日葡辞書)

右のマシロニ・マシロノやマツシロイに対して、明治以降、マシロキが用いられる例がある。

春は桜^{さくら}のあや衣^{ぎよも}、／秋は紅葉^{もみぢ}の唐錦^{からにしき}、／夏は涼^{すず}しき月の絹^{きぬ}、／冬は真白^{ましろ}き雪^{ゆき}の布^{ぬの}、／見よや人々美^{うつく}しき／この天然^{おりのもの}の織物^{おりもの}を。／手際^{てぎはみ}見事に織^おりたまふ／神のたくみの尊^{むね}しや。(「美^{うつく}しき天然」、武島羽衣・詩、田中穂積・曲、一九〇五〔明治三八〕年一〇月刊) 吹きたまる雪が真白^{ましろ}き篠^{しの}の群^{むら}の椿^{つばき}が花はおもしろきかも(長塚節、一九〇六〔明治三九〕年一月二二日詠) 真白^{ましろ}き富士^{ふじ}の根^ね緑^{みどり}の江^えの島^{しま}／仰^{あお}ぎ見るも 今^{いま}は涙^{なみだ}／帰^{かえ}らぬ十二^{じふに}の雄々^{おお}しきみたまに／捧^{ささ}げまつる胸^{むね}と心^{こころ} (「七里ヶ浜の哀歌」、三角錫子・詩、ガードン・曲、

一九一〇〔明治四三〕年一月作)^(注19)

マシロキは、形容詞の口語形が成立後に文語形が作られたものと見られる。右の「美^{うつく}しき天然」の例については、別稿(三)『日本唱歌集』の形容詞^(注20)に述べたが、「夏は涼^{すず}しき月の絹^{きぬ}」と「冬は真白^{ましろ}き雪^{ゆき}の布^{ぬの}」とが対句であることがマシロキの形をとる契機となった

と見られる。なお、これらについては、別稿④「形容詞語幹の用法——十形容詞語幹の構成の複合形状言について——」・(Ⅱ)「ク活用形容詞語幹を後項に持つ形容動詞語幹」・(Ⅲ)「語幹を共通にする形容詞と形容動詞」・(Ⅳ)『長塚節歌集』の形容詞」をも参照されたい。マシロキと同様の例に、別稿(Ⅴ)・(Ⅵ)に見た、マサヲニ「應天門ノ上ノ層ヲ見上バテ真サヲニ光ル物有リ」(今昔物語集・二十七33)ノマツサヲイ「真青くなり、にげたいにもにげられず」(咄・寿々葉羅井雷（注21））に対する、マサヲキ「日かげあかく咲込めたる空のいろの眞蒼き下（注22）に、イむはわれのみなり。」(泉鏡花『龍潭譚』（注23） 鵜飼か丘、鏡花全集3)がある。仮にマサヲキの例がなければ、マシロキは個別的な例と見るところであらうか。

次のアダシ「シク活用」・スガシ「同」については、別稿(Ⅷ)「形容詞スガシ(イ)「清」考」（注24）に述べたので、簡略に示すことにする。風俗歌などに見えるアタシ「他」（注25）、久安百首などに見えるアダシ「徒」（注26）は、アダアダシとの対応もあつて、室町時代末頃以降に見えるアダシ「シク活用」として用いられる。

アタシココロ「他心」 君を措きて他し心を（注27）（安太之古々呂平）我が持たばやなよやすゑの松山浪も越え越えなむや浪も越えなむ（注28）（風俗歌六・君を措きて）

アダシヨ「徒世」 あすしらぬみむろのきしの根なし草なにあだしよに生ひはじめけん（久安百首一三九〇）

アダアダシ これを、あだくしき振舞（注29）といはゞ、女のありさま、苦しからん（源氏物語・末摘花）

なお、アタシ「他」とアダナリ「徒」「つゆをなどあだなる物と思ひけむわが身も草におかぬばかりを」（古今八六〇）との混淆については、『意味上はアダ（不実）の形容詞形と考えられるが、常に名詞と複合した形で使われる。アタシ（他）とアダ（不実）との意味と形の近似による混交の結果生じた語であろう。中世以後の例が多い』（『岩波古語辞典』アダシ「徒」の項）とされる。ただ、下ると、次のように、アダシ「シク活用」として用いられる例が見えるので、ここに「常に」とあるのは如何かと思われる。

かげろふの夕部を待、夏の蟬、春秋を知らぬ、左程あだ敷身を持ての、暫の間も楽めかしと、欺ける（注30）（短編・諸虫太平記下「室町（江戸初頃）」 言の葉の末もいとあはれなるさまを、あだしくなさん事は、誠に鬼畜木石に異ならずと思ひ（伽・小男の草子）

別稿(Ⅷ)に見たように、アダシ「シク活用」は、アダシ「徒」の例があり、また、アダアダシの例があつて、他の重複形容詞—シク活用形容詞の対応（ハカバカシ—ハカシ、マメマメシ—マメシ、ナサケナサケシ—ナサケシなど）との類推によって作られたと言える。

また、古事記歌謡に見えるスガシメを基に、明治末以降にスガシ「シク活用」が用いられる。

八田やたの一本ひともとすげ菅は子持こもたず立ちたか荒あれなむ あたら菅原すがはら言ことをこそ菅原すがはらと言いはめ あたら清すがし女め（阿多良須賀志賣）（記仁徳・六四）

スガシ「シク活用」は、明治末以降の伊藤左千夫・長塚節・北原白秋などに見えるが、活用した例は節のものが最も古いようである。なお、スガシ「シク活用」について、鈴木氏（三）「近代短歌における和語の再生」（注23）は、中村憲吉（一九一八）（大正七）年詠・島木赤彦（一九二二）（大正一一）年詠・土田耕平（一九四一）（昭和一六）年刊・近藤芳美（一九四八年刊）の例を挙げられる。

はしばみのすがれ黄葉もみぢのひや露のあなすがしもよ此朝の晴（伊藤左千夫、一九〇九）（明治四二）年詠 掃はかざりし杉おちばの落葉くまでを熊手くまでもて搔かかしめしかば心すがしき（長塚節、一九一二）（明治四五）年詠 容顔すがの清すがしき、胸むねに薔薇色ばらいろの薄うすぎぬはふり、（北原白秋『第二邪宗門』（暮秋）「一九一六」（大正五）年七月刊） 真綿色まわたしたシクラメンほど清すがしいものはない（「シクラメンのかほり」、布施明・歌、小椋佳・詩・曲、一九七五年レコード大賞）

別稿（八）に見たように、アララギ派の左千夫・節らは、古事記歌謡のスガシメをスガシ「シク活用」と見て用いたかと見られ、個別的理由が考えられるものである。アダシ「シク活用」と同様に、スガシメの例があり、スガスガシ「（小）到（二）坐須賀此二字以音地（一）而詔之吾来（一）此地（一）我御心須賀（一）斯而其地作（一）宮故其地者於（一）今云（一）須賀（一）也」（記神代）との対応があつて、他の重複形容詞——シク活用形容詞の対応との類推によって作られたと見ることもできようが、別稿（九）「重複形容詞の周辺」（注24）に見たように、アダシ「シク活用」とは別にしておきたい。

蜂矢真郷他「抄注・北原白秋第一詩集『邪宗門』語彙」（注25）（先にトログについてふれた）は、「アヲナリ・アヲニ／トホニ」「サミシラヤ」「ヒソニ」（蜂矢真郷）、「ウヅクム」「ナヨラニ」「ユラユル」（岡崎友子）、「スズロカニ」「タワヤ・タワヤニ」「トドロカニ」「ミダラカニ」「ユルカニ」（小川志乃）、「オホラニ」「タユラニ」「フクラニ」「マロラニ」「ヤハラニ」（竹内史郎）、「オホシ」「大」「カアユシ」「スユシ」「タユタシ」「ヒヤシ」（林浩恵）、「トログ／トログ」「ヒビラグ」「ヒヤム」「マロガル」「ユメム」（蜂矢真弓）について述べた（括弧内は担当者）。そのうち、傍線を付した語は、類推によって作られたものと言える。

以下、右の「抄注」によって述べる。アヲニ・トホニは、ク活用形容詞語幹十二の構成であり、マロニ（宇津保物語・菊の宴）・ユルニ（同・国譲下）などとの類推により、アヲ・トホを基に作られ、ヒソニは、サヤニ（萬三四〇二・東歌）——サヤカニ（萬四四

七四)、ノドニ(萬一九七)―ノドカニ(新撰字鏡)、ハルニ(古今六〇四)―ハルカニ(知恩院藏 大唐三藏玄奘法師表啓平安初期点)、ホ

四四九七

ノニ(躬恒集三一五)―ホノカニ(靈異記・上序・興福寺本)などの対応との類推により、ヒソカニ(新撰字鏡)を基に作られたと見

られる。ウヅクムは、アタタム「暖」―アタタマル、カガム「屈」―カガマル、カラム「絡」―カラマル、スクム「竦」―スクマル、

ソム「染」―ソマル、ツカム―ツカマル、ユルム「緩」―ユルマルなどの対応との類推により、ウズクマル「蹲」を基に作られたと見

られる。^(注26) オホラニ・マロラニ・ヤハラニは、「ク活用形容詞語幹十ラ」十二の構成であり、キヨラナリ(竹取物語)・モノガナシラニ

(萬七二三)などとの類推により、オホ・マロ・ヤハを基に作られたと見られる。タユタシは、オモシ(萬八九七)―オモタシ(堤中

納言物語)の対応との類推により、タユシ(蜻蛉日記)を基に作られたと見られる。ヒビラグ「響」は、ヒヒク(記神武・一二)―ヒ

ヒラク「疼」(新撰字鏡)―ヒヒラグ(日葡辞書)の対応との類推により、ヒビク「響」(西大寺藏 金光明最勝王經平安初期点)を基に作

られ、ヒヤム「四段」は、イタシ(記神武)―イタム「四段」(新撰字鏡)・「下二段」(平家物語・覚一本)、ヤスシ(記允恭・七八)

―ヤスム「四段」(靈異記・下卅六・真福寺本)・「下二段」(萬七九四)などの対応との類推により、ヒヤイ・ヒヤム「下二段」(とも

にロドリゲス日本大文典)を基に作られ、ユメムは、上二段動詞↓上二段動詞の変化のものであり、イサチル(記神代)↓イサツ(雄

略紀二十年・前田本)、カイマミル↓カイマム(大和物語)、ココロミル↓ココロム(色葉字類抄)などの変化との類推により、ユメミ

ルを基に作られたと見られる。^(注27)

ところで、現代にニギヤグという例がある。

学生でにぎやいだ 今はこの街も／時代におし流されて 歩く若者もちがう(「名画座」、トワ・エ・モア「再結成」・歌、荒木とよ

ひさ・詩、三木たかし・曲、佐藤貴裕氏の御教示による)

佐藤氏は、これを「にぎわった」と「はなやいだ」のコンタミネーション」ととらえられる。^(注28) そうとらえることもできるが、これ

は、アザヤカーアザヤグ、ケザヤカーケザヤグ、ハナヤカーハナヤグなどの対応との類推により、ニギヤカを基に作られたとも見られ

る。ただ、誤用と見られる可能性も高いであろうか。

四

ケシ型形容詞については、別稿(十)「ケシ・カシイ・カイ」・(十一)「カ・ク・ケシ」・(十二)「二次的ケシ型と二次的ケシ型」^(注32)などに述べたので、簡略に示すことにする。

ケシ型形容詞は、 $\{ \text{カ} \} \{ \text{ケシ} \}$ の対応を持つ一次的ケシ型(例、ユタケシ・ニコヤケシ・アカラケシ)、 $\{ \text{カ} \} \{ \text{ケシ} \}$ の対応を持つ $\{ \text{カ} \}$ が形容詞語幹である準一次的ケシ型(例、ミジケシ)、 $\{ \text{カ} \} \{ \text{ケシ} \}$ の対応を持たない二次的ケシ型に分類され、さらに、二次的ケシ型は、(1)形容詞語幹+ケシの形のもの、(2)力行下二段動詞未然形ないし連用形+シの形のもの、(3)その他のもの(例、ツユケシ)に分類される。

二次的ケシ型は中古以降のもので、その(1)の例は、ナガケシ(大和物語、和歌)、チカケシ(名義抄)、アラケシ(梁塵秘抄)、サムケシ(拾遺七七七)、ヲシケシ(源氏物語・胡蝶、和歌)のようであり、形容詞のク語法 $\{ \text{ケク} \}$ をケシ型形容詞の連用形のようにとらえたもので、一次的ケシ型への類推により作られたととらえられ、その(2)の例は、チヂケシ(名義抄)、ネヂケシ(今昔物語集・四31)、シホドケシ(源氏物語・明石、和歌)のようであり、力行下二段動詞が $\{ \text{ケ} \}$ の形をとることから、一次的ケシ型への類推により作られたととらえられる。

鈴木氏(四)「読本の語彙」^(注30)は、新しく読本に見える二次的ケシ型の(1)の例として、タユケシ(雲妙間雨夜月二)、シルケシ(繁野話二)、心ボソケシ(南総里見八犬伝三十五)を、その(2)の例として、タハケシ(南総里見八犬伝百九)、ウツケシ(三七全伝南柯夢五)を挙げられる。また、同氏(一)は、さらに、新しく近世に見える二次的ケシ型の(1)の例として、ウケシ(上田秋成・藤簾冊子^(注31)武冬)、ヨケシ(同)、イタケシ(岡村良通・寓意草下)、ツラケシ(上田秋成・櫛の杣)、ヤスケシ(田安宗武歌集)、アツケシ(すずみぐさ)、ハシケシ(建部綾足・東の道行ぶり)、および、第一節に見たシゲケシ(藤簾冊子序、良寛)を、その(2)の例として、イハケシ(南総里見八犬伝三十九)を挙げられる。さらに、同氏(五)「現代短歌に見られる形容詞の分類」^(注32)は、新しく近代に見える二次的ケシ型の(1)の例として、ケウトケシ(橋本東声・地懷)、ネタケシ(森鷗外・火)を挙げられる。^(注33)

このように、二次的ケシ型の(1)・(2)（特に(1)）は類推により新しく形成された例が近世擬古文や近代短歌などに見える。それだけではなく、鈴木氏(四)・(一)・(五)・(三)などに指摘されるように、一次的ケシ型も新しく形成された例が近世擬古文・近代短歌などに見えて、これも上代・中古に見える一次的ケシ型（「カー」ケシの対応）との類推によるものと見られ、ケシ型形容詞は、全体として類推の通時的継続と言える様相を示している。^(注34)

五

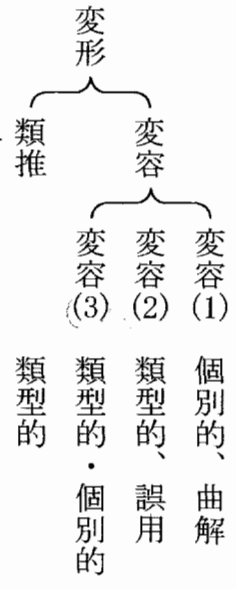
第三節に見たもののうちマシロキ、マサヲキ、アダシ「シク活用」は類推によるものであり、類推による白秋の例も含めて、変形のうちの類推と位置づけることにしたい。また、第一節・第二節に見たものを、変形のうちの変容と位置づけることにしたい。

そして、第一節に見たスゴ、シゲケキ、トロロク・トロログ、フトシ「シク活用」を変容(1)と、第二節に見たもののうちウマシサケ・ウマシクニ「美味」を変容(2)と、第三節に見たもののうちスガシ「シク活用」を変容(3)と呼びたいと考える。ここに、変容(1)は、個別的な理由による変形であって曲解と言えるものであり、変容(2)は、類型的な変形である点では類推と同様であるが、誤用と言える点で類推とは異なるものであり、また、変容(3)は、変容のその他のものであるが、類型的な面もあるが個別的な面もあるものである。スガシ「シク活用」は、類型的な面もあるが成立に個別的な理由が考えられるので、変容(3)に入れておくことにする。なお、変容(2)・(3)と類推とを類型的なものとして括り、変容(1)のみを変容とする方法も考えられるが、用語「変容」にはマイナスの意も感じられるので、誤用のものは変容の中に位置づけるのがよいと考えられよう。

残るウマシビトは、類型的な面もあるが個別的な理由もあるところからとりあえず変容(3)に入れておくことにし、ニギヤグは、誤用と見る可能性もあることからとりあえず変容(2)に入れておくことにしたい。ただ、スガシ「シク活用」を含めて、連続性を持っており、厳密な分類は難しい場合がある。

また、第四節に見た、類推の通時的継続と見られるケシ型形容詞は、類推の一つの様相を示すと言える。

以上を図示すると、とりあえず本稿に見てきたものは次のようである。



スゴ、シゲケキ、トロロク・トロログ、フトシ「シク活用」
 ウマシサケ・ウマシクニ「美味」、(ニギヤグ)
 スガシ「シク活用」、(ウマシビト)
 マシロキ、マサヲキ、アダシ「シク活用」、類推による白秋の例
 ケシ型形容詞

(二〇〇七・七・三一)

注

- (1) [1966・3 角川書店] 第一篇第一章第一節
- (2) 「…娘子^{せとめ}らが春菜摘^つますと〈春菜都麻須等〉…」(萬三九六九)
- (3) [2003・9 東京堂出版] 第十章「ク活用形容詞の一類」、もと「近世に見られる形容詞の一類」(『近代語研究』8 [1990・9 武蔵野書院])
- (4) 『古事記伝』は、シコ「醜」とともにとらえようとして、「志古^シ祁^コ伎^キと云^コべきを、古祁^{コケ}を下上に云るも、「の格なるべし、」とするが、これには無理がある。

- (5) 『日本国語大辞典』(第二版)は、「真福寺本古事記」などに見える「うじたかれ斗呂呂岐(トロロキ)て」による語。現在では「ころろく(嘶)」の誤りとされている。「トロロク「蕩・盪」の項」とするが、右に挙げたように真福寺本には「許呂々岐」とあって、この記述には誤りがあり、『訂正古訓古事記』などに見える「のようにあるべきところである。なお、『日本国語大辞典』(初版)は、「とろけてどろどろになる。とろける。とろく。」として、古事記の例を挙げる。

- (6) 「(とろとろノ活用)とろく(盪)ニ同ジ。」(『大言海』トロロク「盪」の項)
- (7) 後に挙げる注(25)報告書
- (8) 『国語文字史の研究』7 [2003・11 和泉書院]
- (9) 「国文学 解釈と鑑賞」48-2 [1983・1]

- (10) 同氏『木に学べ 法隆寺・薬師寺の美』[1991・8 小学館ライブラリー]
- (11) 初収単行本は『死者の書』[一九四三〔昭和一八〕年九月 青磁社]
- (12) <http://www.awamori.co.jp/sakimoto/>
- (13) 熱田本には「傍^{カタ}國^ノ可^{ウマシ}「怜國也^{クニナリ}。」と、兼右本には「傍^{カタ}國^ノ可^{ウマシ}「怜國也^{クニナリ}。」とある。
- (14) 「萬葉」186 [2004・3]
- (15) 「萬葉」190 [2004・9]
- (16) <http://www.asahi.com/food/news/JJT200703200007.html> など。金水敏氏・岡島昭浩氏の御教示によるところがある。
- (17) 「萬葉」185 [2003・9]
- (18) 『橋本四郎論文集』萬葉集編 [1986・12 角川書店]、もと「萬葉」24 [1957・7]
- (19) 安田寛氏『唱歌』という奇跡 十二の物語 讚美歌と近代化の間で [2003・10 文春新書 346] 十一 参照
- (20) 『国語語彙史の研究』26 [2007・3 和泉書院]
- (21) (四)佐藤武義氏編『萬葉集の世界とその展開』[1998・4 白帝社]・(五)『国語語彙史の研究』21 [2002・3 和泉書院]・(六)『同』22 [2003・3 同]・(七)『同』24 [2005・3 同]
- (22) 「大阪大学大学院文学研究科紀要」45 [2005・3]
- (23) 「日本語学」8-10 [1989・10]
- (24) 『国語語彙史の研究』25 [2006・3 和泉書院]
- (25) 二〇〇三～〇四年度科学研究費補助金 基盤研究(c)研究成果報告書『文献に現れた述語形式と国語史の不整合性について』(代表者…蜂矢真郷、分担者…金水敏・岡島昭浩・岡崎友子)
- (26) ウツクム^ズが、与謝野晶子「天鷲絨のにほひ」(『晶子詩篇全集』[一九二九〔昭和四〕年一月 実業之日本社])にも見えるとあるが、「天鷲絨のにほひ」は与謝野晶子ではなく北原白秋の作で『邪宗門』所収であるので、ここに訂正する。なお、ウツクム^ズは、馬琴の椿説弓張月^{前二}に、「女使^(いしもち)ども驚きまどひ、みな一帯^(ひとかわ)に蹲踞^(うつぐみ)ぬ。」と見える(岡崎氏の御教示による)。

- (27) ユメムは、国木田独歩「わかれ」〔一八九八^{〔明治三二〕}年、定本国木田独歩全集2〕、尾崎紅葉「金色夜叉続々」^五〔一八九九―一九〇二^{〔明治三三―三五〕}年、紅葉全集7〕にも見える。また、萩原朔太郎『蝶を夢む』〔一九二三^{〔大正一二〕}年新潮社〕にも見える（柏木隆雄氏の御教示による）。

(28) <http://www1.gifu-u.ac.jp/junden.htm> の二〇〇六年八月一日「にぎやぐ」欄

(29) ①『同志社国語学論集』[1983・5 和泉書院]・②「叙説」14 [1987・10]・③『国語語彙史の研究』20 [2001・3 和泉書院]

(30) 『講座日本語の語彙』5 近世の語彙 [1982・6 明治書院]

(31) シゲケシは、二次的ケシ型の(2)の近世における例である点で、類推によるものと見られないではないが、第一節に見たように、その成立は個別的な理由によるものと考えられる。

(32) 「専修国文」44 [1989・2]

(33) 別稿(七)には、マタケシ（長塚節歌集）を挙げた。

(34) これらのことは、別稿(七)に述べたケシ型形容詞の歌語性と関連が深いと思われる。

キーワード…語形成 変形 変容 類推 類推の通時的継続

〔付記〕 本稿は、大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座 二〇〇五―〇七年度共同研究「テキストの生成と変容」（代表者…飯倉洋一氏）〔日本文学・近世〕第十四回研究会（二〇〇七年七月一九日）における口頭発表を基にしたものである。研究会およびその後には御質問・御意見をいただいた方々に感謝し、とりわけ、共同研究のテーマが本稿の発想を生んだところがあるので、飯倉氏に感謝するものである。また、本稿は、二〇〇六―〇八年度科学研究費補助金（基盤研究(c)課題番号一八五二〇三五三）による研究成果の一部である。

〔『国語語彙史の研究』27 [2008・3 和泉書院] 掲載〕

（飯倉洋一氏編 二〇〇五―二〇〇七年度大阪大学大学院文学研究科
広域文化表現論講座共同研究 研究成果報告書 『テキストの生成と変容』[2008・3] にも掲載）

〔追記〕 研究会およびその後にはいただいた御意見、とりわけ岡島氏の御教示を活かしていないところがあるが、その責は筆者にある。

『新編 左千夫歌集』の形容詞

蜂 矢 真 郷

近代短歌に見える形容詞に関する問題については、鈴木丹士郎氏(一)「現代短歌に見られる形容詞の用法——補助活用の本活用化——」・(二)「現代短歌に見られる形容詞の分類」・(三)「近代短歌における和語の再生」^(注1)に詳しい。氏は、(a)日本近代文学大系23『石川啄木集』、(b)同43『斎藤茂吉集』、(c)現代日本文学全集69『若山牧水 島本赤彦 中村憲吉 木下利玄集』、(d)同90『現代短歌集』^(注2)に収められている短歌を中心に、文語語形でありながら中古などには見えない形容詞の語彙や、同じく形容詞としては中古などに見えてもその用法が中古などには見えないものの例を多く挙げて考察されている。

氏に続き氏の論を補う意味で、前稿(一)『長塚節歌集』の形容詞・(二)『日本唱歌集』の形容詞^(注3)においてこの問題を取り挙げてきたが、前稿(一)・(二)に引き続き、『新編 左千夫歌集』^(注4)の形容詞の注意される例を挙げて見て行きたい(前稿(三)「形容詞スガシ(イ)「清」考」・(四)「語の変容と類推——語形成における変形について——」^(注5)にも関連するところがある)。

なお、鈴木氏(一)・(二)・(三)の他に、近世擬古文に見える形容詞について述べられる同氏(四)『近世文語の研究』第六章・第十章および附録「形容詞本活用機能を果たしている補助活用語彙一覧」、(五)「補助活用形容詞の機能拡大——近代文語の一問題——」^(注6)についても、必要に応じてふれる。

一

まず、形容詞補助活用(カリ活用)の例を挙げる。

鈴木氏(一)が挙げられるのは、形容詞補助活用(カリ活用)が、中古などには本活用が用いられるところに用いられるものである。同

氏(一)・(三)・(五)はこれを「補助活用の本活用化」と呼ばれる(同氏(四)は第六章の標題のように「形容詞補助活用の活用形造出ならびに機能拡大」とされ、同氏(五)は標題のように「機能拡大」ともされる)。そうした例を左千夫の短歌に求めてみると、次のようなものがある。

〔已然形〕 大詔かしこかれどもまぐはしき絵の腕ある君を悲しむ(一九〇四〔明治三七〕年詠)

〔終止形〕

とりよろふ衣笠山を吾林泉の奥の見立と好み高かり(一九〇六〔明治三九〕年詠)

おのづから我を傾むけ父親の心たぎれば世は樂しかり(一九〇八〔明治四二〕年詠)

人を訪ふ道の固凝音寒く森の青木葉の実の乏しかり(一九一一〔明治四四〕年詠)

国遠く四とせ空く相恋ひて逢ひし吾妻猶も若かり(同)

汝がいのち夢と淡しき母の子よ母を離れて汝は空しかり(一九一二〔明治四五・大正元〕年詠)

いとけなき児等の睦びや自が父のまづしきも知らず聲樂しかり(一九一三〔大正二〕年詠)

椎森の若葉円かに日に匂ひ往来の人等みな樂しかり(同)

右の他に、オホカリ「多」の例として、

〔終止形〕 国民の嘆をよそに国のため君の爲めといふ族多かり(一九一三〔大正二〕年詠)

の例も見えるが、これは、「平安時代の和文では、連用形「おほく」の他は、カリ活用の活用形が用いられ、特に、その終止形「おほかり」が用いられることは注目される。(略)一方、訓読資料や漢字仮名文資料ではク活用形が用いられ、この流れが現在に至る。」(『古語大辞典』オホシの項の「語誌」欄)とあるように、平安和文には、「この泊りのほまには、種々のうるわしきかひ、いしなどおほかり」(土左日記)などの例があり、必ずしも注意される例とは言えない。

おのが持つ玉におのほれ茶の花の世にうとかるを心にもせず(一九〇九〔明治四二〕年詠)

は、本来はウトキヲとあるべきだと見ることもできそうであるが、ウトクアルヲとあるのが本来であると見るのがよいもので、「補助活用の本活用化」とは見ないのがよいであろう。

前稿(一)に見た節の短歌に比べて、左千夫の短歌における「補助活用の本活用化」は多いと言える。

二

次に、未然形ケ・已然形ケの例を挙げる。

未然形ケ十ム

蓼科の山浦やまうらびとは山芋のとろろよけむと吾に饗あへせり (一九〇四〔明治三七〕年詠)

朝日さす窓のさう子この明あからさまに堪たへずよ妹いもと云はゞよけむを (一九〇八〔明治四二〕年詠)

世の中の人のいがみの醜しこたま団だんほふりつくさば後は安やすけむ (一九〇八〔明治四二〕年詠)

去歳こぞの今日泣なきしが如ごとくおもひきり泣かばよけむを胸のすべなさ (一九一〇〔明治四三〕年詠)

未然形ケ十ク

紅葉狩都もみぢかりの秋のよけくこそ君おもひでうたゝこひしも (一九〇三〔明治三六〕年詠)

蛙鳴かはづく月夜つきよよけくに心動こころきさ夜ふけにしてまた槐蔭ききえ (一九〇五〔明治三八〕年詠)

翁おきな我れ耳の遠とほけくたける等が山ゆる声も蛇あぶと聞居ききぞり (一九〇八〔明治四二〕年詠)

已然形ケ十ド・ドモ

春山ノ花モヨケドモ夏山ノ緑ヲコノム牛飼吾ハ (一九〇〇〔明治三三〕年詠)

日まはりの花も高たかけど大蓼いぬたでの穂蓼ほたでの花に猶なほしかずけり (一九〇三〔明治三六〕年詠)

伊勢と云へば道は遠うつしよけど現世の人なるうちは言ことはかよへり (一九〇六〔明治三九〕年詠)

煤すすびたる四壁しへきの庵いほに物はなし物は無なけども二つ勾玉まがたま (一九〇八〔明治四二〕年詠)

未然形ケ十ム、未然形ケ十ク、已然形ケ十ド・ドモを通じて、ヨシが多く用いられていることがやや注意される。已然形ケ十ドモの例において、ヨケドモ・ナケドモと用いられ、ヨケレド・ナケレドでも音節数は同じであるが、已然形ケを用いていることが注意されてよい。なお、已然形ケレの例も、少ないが見える。

山深^{やまふか}み世^よに遠^{とほ}けれや虫のねも数多^{あまた}は鳴かず月はさせども（一九〇九「明治四二年詠」）

前稿(一)に見た節の短歌に比べて、左千夫の短歌における未然形ケ・已然形ケの例はやや多いが、節の短歌に見えた已然形ケ十バの例は見えない。

三

ケシ型形容詞の例はかなり多い。以下に挙げる問題のあるものを別にして、ユタケシ・サヤケシ・シヅケシ・ハルケシ・カソケシ・ノドケシ・アキラケシおよびツユケシが見える。これらは、ユタケシ（萬四三六二）・サヤケシ（萬三三三四）・シヅケシ（萬三三八八）^{三三八八}・ハルケシ（萬三九八八）^{四〇二二}・カソケシ（萬四二九一）^{四三三五}・ノドケシ（古今八四）^{四三八六}・アキラケシ（萬四四六六）^{三三三八}およびツユケシ（古今一八八）^{四四九〇}のように、上代・中古に例の見えるものである。しかも、中世の和歌にも用いられるものばかりであり、例えば、夫木和歌抄には、ユタケシ（八一五〇）・サヤケシ（二四〇二）・シヅケシ（四八三二）・ハルケシ（八八二）・カソケシ（六六二三）・ノドケシ（二一九）・アキラケシ（五一二六）・ツユケシ（六八七）のようである。

サムケシ ろしや風^{あざぞら}またも寒^{さむ}けしちいさふぐり早くつつまね此たふさぎに（一九〇三「明治三六」年詠）

朝空^{あさぞら}のいたも寒^{さむ}けく湯煙も高くは立^たたずおほにまよへり（一九〇八「明治四二」年詠）

ウケシ かぎろひの朝日の軒^{のき}に鮮^{あざや}かに咲きつゝ憂^{うれ}けき紅梅の花（一九〇九「明治四二」年詠）

世の中を憂^{うれ}けく淋^{さび}しく病む人らしまし茲^{ここ}に居れだありあの園^{その}（一九一〇「明治四三」年詠）

ヨケシ 秋山^{あきやま}に西吹^{にしふ}き起り空晴るゝ見^みの胸開^{ひら}く形^{なり}よけき釜（一九〇五「明治三八」年詠）

マタケシ 灯^ひのある家^{いへ}灯^なの無き家を見つゝゆき全^{また}けく暮^くれぬ森のあたりに（同）

ヒロケシ 御仏^{みぶつ}のめぐみ広^{ひろ}けく天^{あま}つ日のい照らす極^{きは}みめぐみ広^{ひろ}けく（一九〇二「明治三五」年詠）

アヤフケシ 薬師^{くすり}なるつとめつくすと危^{あやふ}けき道も踏^ふみけむあはれますらを（一九〇三「明治三六」年詠）

これらは、いずれも形容詞語幹十ケシの形のものであり、その形態のものが形容詞のク語法から形成されたととらえられること、別稿(一)「ケシ・カシイ・カイ」^(注8)に述べた。このうち、サムケシは、「あしひきの山下^{した}風も寒^{さむ}けきに今宵^{こよひ}も又や我^わがひとり寝^ねん」(拾遺七七

(七)のように、中古に見える。ウケシ・ヨケシは、鈴木氏(四)(第十章)で、近世の上田秋成『藤簾冊子』に

……しかはあれど、世は海なれば、大船に、真櫂しどぬき、わたりする、人のうけきも、喜びも、我はしらずえ……(二冬)

……豊葦原の、久方の、天のます人、おのが世の、よけきにあかねば、悲しびを、むかひの岡の、桜花、咲のをりに……(同)

の例があることが示される。マタケシは、鈴木氏(四)にも同氏(二)・(三)にも挙げられていないが、

なうれひそ人はいへどもまたけてあらばあらむ我愁ひざれや(一九一二「明治四五」年詠)

と、前稿(一)に見た節の短歌に例が見えるものである(左千夫の例の方がより古い)。ヒロケシ・アヤフケシは、鈴木氏(四)にも同氏(二)・(三)に挙げられておらず、前稿(一)に見た節の短歌にも見えないので、珍しい例と見られる。

アララケシ 悲しみを知らぬ人等の荒らけき声にもわれは死ぬべくおもほゆ(一九一一「明治四四」年詠)

は、形容動詞語幹アララカと対応するもので、このような例で近世に下るものに、カスケシ(椿説弓張月^{前五})・ウララケシ(笑本魂膽枕)・ホガラケシ(新みなし栗)・キヨラケシ(田安宗武歌集)があること、鈴木氏(四)(第十章)が示される。鈴木氏(二)・(三)は、カスケシ・ウララケシ・ホガラケシなどが近代短歌等に見えることも示される。キヨラケシは、「音楽室に只獨り友待顔に調ぶなると清らけき琴の音に誘はれつゝも」(木村曙「婦女の鑑」^巻、一八八九「明治三三」年)のような例も見える。

オホキケシ 霜枯野のうすくらがり到大けき悲しき山が煙立て居り(一九一二「明治四五・大正元」年詠)

は、形容詞オホキイが鎌倉時代に成立して以降に、その文語形から、サムケシ等と同様に、形容動詞語幹十ケシの形のものが形成されたものと見られ、やや特殊な例である。形容動詞オホキナルとあつてもよいところである。

アタタケシ 冬ごもりあたけき日は人に逢はず土弄そぶ楽焼道人(一九〇四「明治三七」年詠)

春雨の暖き夜をおくのまに児等をあつめて花見約すも(一九一三「大正二」年詠)

は、仮名書き例ではないが萬葉集に「しらぬひ筑紫の綿は身に付けていまだは着ねど暖けく見ゆ(暖所^二見^一)」(三三六)と見えるものである。^(注9) 他方、

アタタカシ 暖かき春をまちしをいたつきの間もあらせずときくが悲しも(一九〇〇「明治三三」年詠)

麻葉野や雨暖く麦肥えてうら若桑の芽も暢にけり(一九〇八「明治四二」年詠)

あたゝかき心こもれるふみ持て人思ひ居れば鶯の鳴く（一九〇九〔明治四二〕年詠）
まづしくて児等のあまたを養へどそば湯あたたく淋しくもなし（同）

の例もあり、アタタケシ・アタタカシが混在して見える。前稿(-)に見た節の短歌には、アタタカシのみで、アタタケシの例は見えなかったもので、混在する理由は明らかでないが、左千夫のアタタケシの例は注意してよいと考えられる。

四

x(ヲ) yミのミ語法の例は、

かつしかや市川あたり松を多み待つ林の中に寺あり（一九〇〇〔明治三三〕年詠）

かつしかの田中にいつく神の森の松をすくなみ宮居さぶしも（同）

など多くが見える。ミ語法の例の多いことは、正岡子規や、前稿(-)に見た節の短歌と同様であると言つてよい。

節の短歌にあつたような違例はあまり見えない。

柿の木を植うと狭ばみと菊畑の惜しき霜菊抜きて植つも（一九〇五〔明治三八〕年詠）

冬の日の寒きくもりを物もひの深き心に淋しみと居り（一九一一〔明治四四〕年詠）

は、四段動詞セバム・サビシムの例は見当たらないが、名詞のセバミ「Xebami. 狭い所。」（日葡辞書・補遺）の例があり、同じくサビシミ「ざれ言に淋しみをふくみ、可笑みにあはれを盡して」（一茶・おらが春、惺庵西馬跋文）・「寂靜」と、「沈黙」のあぐむ森ならじ。（薄田泣菫『白羊宮』わがゆく海、一九〇六〔明治三九〕年刊）の例があるので、そうした例の影響も考えられようか。また、

きりふりの滝の岩つばいや広みゆるやかに魚あそぶみゆ（一九〇〇〔明治三三〕年詠）

汝等二人相新しみ世に立つと春の神々手を打ちはやす（一九一一〔明治四四〕年詠）

の二例は、yの前に接頭語「いや」「相」が用いられているのが通常とやや異なる点で注意されてよいであろう。

シク活用形容詞語幹が名詞を伴う例は、全ての例を挙げておく。

クハシ十名詞

さにづらふくはしをとめ少女が山桜かざせる見れば神にしありけり（一九〇〇〔明治三三〕年詠）

露の葉の広葉ほこりてかよわなるくはし草花かたより咲けり（同）

二葉三葉まぐはし新葉にひはたちそひて蕾つぼみふくらみぬ冬深草（同）

桑子くはこなす実のむらなりになりたれしくはしはしばみ葉はもみぢせり（同）

白露の千玉ちたまをふゝむくはし花八百日はなやほかちらさぬ神業かみわざもがも（一九〇一〔明治三四〕年詠）

花ごとに露の白玉しらたまふふみたるくはし桜に夕日さしくも（同）

紐鏡ひもかがみかけのよろしくたつの木のくはし若芽は相向あひむき合へり（一九〇二〔明治三五〕年詠）

名ぐはし栗のはやしの色づける秋恵林寺あきりんじに殿作とのつくりあり（一九〇六〔明治三九〕年詠）

ロゼストをそこに捕とらへし鬱陵うつりようの島しまうらぐはし夕波青葉ゆふなみの鬱陵うつりようのしま（旋頭歌）（一九〇七〔明治四〇〕年詠）

マダハシ十名詞、ナダハシ十名詞、ウラダハシ十名詞を含めて、クハシ十名詞の例が多い。

サビシ十名詞 ……ふる雨にさびし御庭みにはに鶏頭けいとうも秋海棠しゅうかいだうもあれど……（一九〇四〔明治三七〕年詠）

ナツカシ十名詞 始めての君にしあるを礼もなくなつかし親に相逢しんぽうひしこと（一九〇七〔明治四〇〕年詠）

イカシ十名詞の例は、やや注意されようか。

くろがねのいかし八艦やふねをロシヤ人ひとは代しろもこはなくわが的にせり（一九〇四〔明治三七〕年詠）

商人あきびとの乗れる小舟をふねをくろがねのいかし大ふね四つもて撃うちきや（同）

黒加ねくろがを千重ちへにゆふ登毛ともしも天皇すめらぎ能の加志美伊豆かしみいづに楯津久辺師矢たてつくべしや（一九〇五〔明治三八〕年詠）

形容詞イカシは、ク活用かシク活用かが問題になるものであるが、左千夫はシク活用形容詞語幹の用法として用いている。上代には、

イカシホコ「從^(レ)来如^(二)嚴矛^{嚴矛此云一保箇之}取^(レ)中事^(二)」(舒明前紀)などの例があるので、特に問題はない。なお、「美伊豆^{みいづ}」は御稜威^{みりいつ}のことであろう。

注意されるのは、ウマシ+名詞の例である。

白木綿^{しらゆふ}の花と湧^{わき}たつ玉もひのうましくみすは飲めどあかぬかも(一九〇一「明治三四」年詠)

うまし国越^{くにこし}の国原^{くにはら}ときは木も冬木もなべて新^にみどりせり(一九〇二「明治三五」年詠)

朝廷のまつめの声と竹の子のうましあつもの後^{のち}もふらむか(一九〇三「明治三六」年詠)

すがくし宇万志岡田^{うまし}を櫓^うくぬぎ荒^あるらく野辺^{のべ}と吾^{わが}おもひこし(同)

うまし子^こに嚙^かみて含ませ物やるとかみ聞^{きこ}ゆれど解^げせぬ君かも(一九〇八「明治四二」年詠)

常世^{とこよ}さぶ天^{あめ}の群山^{むらやま}朝宵^{あさよひ}に見つゝ生^おひ立つうまし信濃^{しなの}は(一九〇九「明治四二」年詠)

形容詞ウマシは基本的にク活用であるが、語幹+名詞の用法においては、ク活用形容詞語幹の用法と見られるウマ+名詞の例「ウマヒト」…貴人^{うまひと}は「宇摩比等破^{うまひと}」貴人^{うまひと}どちや「于摩譬菩奴知野^{うまひと}」…(神功紀・二八)と、シク活用形容詞語幹の用法と見られるウマシ+名詞の例「ウマシアシカビ^{うま}ビ^{シカ}ビ^コヂノカミ」宇摩志阿斯訶備比古遲神^{うま}以^こ音^し神^な名^み」(記神代)とがあり、さらには、シク活用に活用する「うましき世に」(竹取物語)の例もある。

右の左千夫の例は、ウマシ+名詞の例である。ウマシ+名詞の例については、橋本四郎氏「うまし」^(注1)、林浩恵氏「形容詞語幹の用法の違例」^(注12)が述べられるように、ウマ+名詞の例とウマシ+名詞の例とは意味の差違が認められ、林氏によれば、前者は「状態・感覚的意味」を、後者は「評価・感情的意味」を表すものである。

ところで、左千夫の例の、「うまし国^{くに}」は、萬葉集(二)・日本書紀古訓(垂仁紀二十五年三月・熱田本)にも例があり(前稿(四)・別稿(二))「ウマシクニソとウマシキクニソ——ウマシ「シク活用」の問題から——」^(注13)参照)、特に問題はない。「うまし子^こ」は、神名の例につながるものであるか。「宇万志岡田^{うまし}」(岡田は村名)・「うまし信濃^{しなの}」は、海宮に対する美称と見得るウマシヲバマ「可^可怜^可小^可汀^可此^可云^可波^可麻^可師^可」(神代紀下)の例につながるものとも見られる。しかし、「うましくみす」については、その「くみす」は「詠乳酒^{クミス}之歌^{ノカ}」とあるように酒の一種であつて、ウマシは美味という「感覚的意味」を表すものと見られ、上代の例から見るとこれは誤用と言つてよ

い^(注14) 同様に、「うましあつもの」のウマシも美味の意と見られ、誤用と言ってよい。なお、

西透^{にしす}きて空も晴れくるいさゝかは水もひきしに夕げ^{ゆふ}うましも（一九〇七「明治四〇」年詠）

麦飼^{むぎ}もとなりの飼はうましとぞ昔の人も云ひてありける（一九一三「大正二」年詠）

うまきもの食^くはまく思はゞ何よりも身をすこやかに持つべくありける（同）

のような美味の意のウマシは、「うまきもの」歌のようにク活用として用いられている。

六

秋更^{あきふ}けて日和^{ひより}よろしき乾草^{ほしくさ}のうましきかをり小屋^{こや}に満^みたせり（一九〇八「明治四二」年詠）

第五節でシク活用形容詞語幹の用法としてのウマシについて見たが、さらに、左千夫は、右のようにシク活用に活用して用いている。これも、嗅覚という「感覚的意味」の例と見られ、誤用とするのがよいと考えられる。

このように、ク活用とシク活用との活用の種類が問題になるものに、他にアハシがある。

汝^ながいのち夢と淡^{あは}しき母の子よ母を離れて汝^なは空^{むな}しかり（一九一二「明治四五・大正元」年詠）

おもかげや神と尊^{たふと}くにほへりし淡^{あは}しきみをとほに偲^{しの}ばむ（同）

左千夫は、アハシをシク活用として用いている。ク活用にもシク活用にも活用する両活用形容詞としてのアハシは、鈴木氏^(A)「形容詞両活用（ク活・シク活）」についての覚書^(注15)（前）、村田菜穂子氏『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』^(注16)に、シク活用の例として

仏法には末^{すゑ}の世になり候へばものあちはひも淡^{あは}しく（仮・祇園物語上）

などがあることが示されている。^(注17) 鈴木氏^(四)（附録）には、

淡^(あは)しかる味にかどもつ豆のしる高きいやしき品にまじはる（橘曙覧「福寿艸」豆腐歌）

の例も挙げられている。村田氏は、重複形容詞アハアハシからの形成と見られている。左千夫は、近世の例を参考にしたのであろうか、あるいは、独自にシク活用に活用させたのであろうか。

やれ壁を塗換しかば生かべの色めぐしもよ乾かずもがも（一九〇二〔明治三五〕年詠）

蚤のごと群居もとほりはねまはる小さき児らをめぐしと見ずや（同）

手をめぐし足をめぐしみ緑児の手足よごし、猶しめぐしも（一九〇八〔明治四二〕年詠）

幼児は泣くもめぐしき七人の親なるからに然るにかあらむ（同）

新しきをみなはめぐし然れどもあを臭き香に魂は消えつも（一九一三〔大正二〕年詠）

いとけなくめぐしき児等が丹のおもの輝くいまを貧しといはめや（同）

また、メグシも問題である。前稿(四)に、右の「手をめぐし」歌、「幼児は」歌を挙げて少し見たが、左千夫はメグシを「幼児は」歌・「いとけなく」歌などのようにシク活用として用いている。メグシが本来はク活用であること、「我が〔之〕小子の偏に鍾（り）て愛クいまししは、」（西大寺藏 金光明最勝王經平安初期点・春日政治氏釈文）の例を挙げて前稿(四)に見た通りである。メグシ「シク活用」の例はいつ頃から見えるのか、詳査する必要がある。他方で、メグシとともに名詞＋クシの例とされるココログシは、

春雨の夜を一人居り心ぐく歌思へどもまとまりかねつ（一九〇二〔明治三五〕年詠）

ひさかたの秋の初風こころぐし君に恋ひつつ花に物いふ（一九〇八〔明治四二〕年詠）

のようで、ク活用に用いられている。萬葉集のメグシ・ココログシは、「相見れば常初花に心ぐし（情具之）愛しもなしに（眼具之毛奈之尔）」（三九七八）・「心ぐし（己許呂具志）いざ見に行かなことはたなゆひ」（三九七三）のような終止形の例では活用の種類がわからず、「人もなき古りにし里にある人をめぐくや君が（愍久也君之）恋に死なせむ」（二五六〇）の例はメグクの確例とするにやや難しいとも見られ、「春日山霞たなびき心ぐく（情具久）照れる月夜にひとりかも寝む」（七三五）の例はココログクと訓まれて、これらのことが、ココログシがク活用に、メグシがシク活用に用いられる遠因かとも思われるが、確かではない。

活用の種類の問題ではないが、スガシもここに挙げておく。

はしばみのすがれ黄葉のひや露のあなすがしもよ此朝の晴（一九〇九〔明治四二〕年詠）

国柄の色白君が病上り若葉すがしき家に居るらむ（一九一一〔明治四四〕年詠）

うらすがしき頬にまつはる黒髪を見るに堪へねど目よは放れず（一九一二〔明治四五・大正元〕年詠）

朝じめり庭の清がしき花晴れに殊に妻呼び茶を運ばしむ（一九一三「大正二」年詠）

スガシについては前稿(三)に述べたが、その際に左千夫の短歌については『左千夫歌集』を見たので、「はしばみの」歌の例しか挙げなかった。ここに、改めて『新編 左千夫歌集』によつて、三例を加えることができる。しかも、この三例はいずれもシク活用に活用して、前稿(三)にも挙げた「はしばみの」歌が語幹の用法の例であるのと異なっている。シク活用に活用した例においても、節の例掃かざりし杉の落葉を熊手もて搔かしめしかば心すがしき（一九一三「明治四五」年三月詠）より古いことになる。なお、形容詞そのものではないが、

若みどり青葉が中の新室に清住む二人おもかげに立つ（一九〇三「明治三六」年詠）
の「清」は、副詞的接頭語として用いられていて、注意される。

七

重複形容詞は、阪倉篤義氏「歌ことばの一面」^(注18)が述べられるように、和歌に用いられにくいものの一つであるが、その例はかなり見える。

ユウシ あけの塔ゆゝしなつかし大雪のふれるが中にたてるを見れば（一九〇〇「明治三三」年詠）

ワカワカシ わかくしき青葉の色の雨に濡れて色よき見つゝ我れを忘るも（一九一三「大正二」年詠）

スガスガシ すがくし宇万志岡田を櫓くぬぎ荒るらく野辺と吾おもひこし（一九〇三「明治三六」年詠）

産屋住み気ながき妻が面瘦せの清々しきに恋ひ返りすも（一九一〇「明治四三」年詠）

汝れ屋守なながのろきと小鼠のこましくしきとわれ解し難し（一九〇八「明治四二」年詠）

ウヤウヤシ 白玉の憂ひをつゝむ恋人が只うやうやし物もいはなく（同）

キラキラシ 雨晴れて空青き日の朝川に花きらきらし秋海棠の花（一九〇四「明治三七」年詠）

板間もる強き日影はきらしくし湯つぼの底に波を映せり（一九〇九「明治四二」年詠）

ヨワヨワシ よはくしくうすき光の汝がみたま幽かに物に触れて消にけり（一九一三「明治四五・大正二」年詠）

ニクニクシ にくくしロシヤ夷を片なぎになぎて尽さね斬りてつくさね (一九〇四〔明治三七〕年詠)

ミヅミヅシ みづくしき茎のくれなゐ葉のみどりゆづり葉汝れは恋のあらはれ (一九一三〔大正二〕年詠)

ホソボソシ 夕涼の河岸のたゞすみ細々し我がおもふ人のたゞ白く立つ (一九一〇〔明治四三〕年詠)

オドオドシ 土の音を遂の別れとおもへども心おどくしはふりのいそぎ (同)

モノモノシ 庭の木のさびれ合飲木の葉しひたぐる風ものものし荒れ来るらんか (一九〇六〔明治三九〕年詠)

家作り物々しきを煤さびて蚕飼に暗し世の移りかも (一九〇九〔明治四二〕年詠)

秋草のしどろが端にもものしく生きを榮ゆるつはぶきの花 (一九一二〔明治四五・大正元〕年詠)

ナホナホシ 日に千度手にとりめでなほくしあかずともしき能牟許のらく焼 (一九〇二〔明治三五〕年詠)

いとほしみこひて嘆けばあかづりの手になほくし汝にこひまさる (一九〇八〔明治四二〕年詠)

ウヒウヒシ 鶯や吾家を近く汝が声のうひくしきに我れまけはてぬ (一九〇九〔明治四二〕年詠)

重複形容詞が和歌に用いられにくいのは、音節数が多いことに一つの理由があると見られ、二音節の重複素を持つ重複形容詞がく・きのように活用すると六音節になるので、七音節句には用いることができるが五音節句には用いにくいと考えられる。その点で、「わかくしき」「よはくしく」「みづくしき」「ものものしく」(以上、五音節句)、「心おどくし」(七音節句)のように、字余りの例がやや多いことは、右のとらえ方を裏づけていると見られる。

八

その他、注意される例を挙げる。

オホシ「大」の例が、かなり見える。

鎌倉の大き仏は青空をみかきときつゝ万代までに (一九〇二〔明治三五〕年詠)

もろくを救はむためと御仏の大きみ須加多こゝにまつりし (同)

かまくらの大き御仏をろがめばみのれさかれる時しおもほゆ (同)

青山のかきのまほらに万代よろづよといます御仏みほとけ大きみほとけ(同)

千年ちとせふる大き仏にほへのみ庭辺にはべの梅のたふとさ世の物に似ず(同)

万代よろづよにさのこりまして汚世けがれよを救すくひたまはね大きみほとけ(同)

これら「大き仏」「大き御仏」などの例は、「鎌倉なる大仏をろがみて詠める短歌十三首」のうちのものである。

いにしへゆいまに至りて陶物すあもののおほき聖ひじりの楽らくの道入だうにふ(一九〇二「明治三五」年詠)(注19)

妻よりも名よりも先に黄金きんちふ大き聖ひじりをかくまへ吾背わがせ(一九〇五「明治三八」年詠)

人のこゝろ明あかるく照てらす大き聖黄金能く知る君にしありけり(同)

望月もちづきと光ひかりおろがみ吾仰わがあふぐ大聖おほきひじりも釜めでませり(一九〇六「明治三九」年詠)

おほきひじり世に現あらはれて天地あめつちも動くかなめをとほに得にけり(一九〇七「明治四〇」年詠)

オホキヒジリの例は、萬葉集に「酒の名を聖と負せし古の大き聖の(大き聖之)言の宜しき」(三三九)と見えること、別稿(三)「多

少と大小」(注20)にふれた。

黒鉄くろがねの巨おほきみ艦ふねも名に負へるやまと魂だまにし御ごしてたゝかへ(一九〇四「明治三七」年詠)

赤らくのゆたけき形かたの大きもひ徳川とくがわの代の盛さかりおもほゆ(一九〇五「明治三八」年詠)

以上のオホシ「大」はいずれも連体形であり、上代の例と同様の用いられ方である(別稿(三)参照)。

北山の夕照ゆふてる岡に立つ吾われを遠とほにとりまく信濃群山しなのむらやま(一九〇四「明治三七」年詠)

夏山なとりの緑みどりのしげりうらゝかに鳴くは松雀まつめか谷遠たにしほにして(一九〇七「明治四〇」年詠)

まどろみのおほなる夢ゆめのほのかにも見るよしあらば堪たへて居ましを(一九〇九「明治四二」年詠)

工藤力男氏「上代形容詞語幹の用法について」(注21)が指摘されるように、上代において、「ク活用形容詞の語幹が、単独で二語尾をとる

ことはない」(氏は、シク活用形容詞語幹も単独で二を伴うことがないことを合わせ指摘される)。しかし、時代が下ると、別稿(四)「一

音節語幹の形容詞」・(五)「ク活用形容詞語幹を後項に持つ形容動詞語幹」・(六)「語幹を共通にする形容詞と形容動詞」(注22)に見たように、宇

津保物語にマロニ「沈ちんをまるに削りたる貫簀ぬきす(菊の宴)・ユルニ「花さそふ風ゆるに吹ける夕暮ゆふぐれに」(国譲下)の例が見え、また、柳田

征司氏「抄物の語彙」^(注23)などに示されるように、室町時代の抄物には多く見えるようになる。北原白秋『邪宗門』に、
あはれ、はや、焼酎は醋とかはり、人は轆かれて、／盲ひつつ血に叫ぶ豹の声遠に泡立つ。(悪の窓 断篇七種／一 狂念、一九〇
八〔明治四二〕年作)

の例が見えること、別に述べた。白秋のトホニの例の方が少し下るが、左千夫の短歌の影響があるかどうかは、よくわからない。

はしばみの実もいちじろくあらはれてきばめる木の葉や／おちつくす(一九〇〇〔明治三三〕年詠)

軒の端の楓の芽立ちくねなみに色いちじろくなりけるかも(一九〇二〔明治三五〕年詠)

イチジルクについては、前稿(二)で述べたが、これはイチジロクの例である。イチシロシは、萬葉集に「隠り沼の下ゆ恋ひ余り白波の
いちしろく出でぬ(伊知之路久伊泥奴) 人の知るべく」(三九三五)とあり、第三音節は清音シと見られる。濁音ジの確例は、
三九五七

「ICHIIROKI, -KU イチジロキ adj. Same as ichijirushi.」(和英語林集成・第三版)まで下るかもしれない。

牛飼が歌咏む時に世の中のあらたしき歌大いに起る(一九〇二〔明治三五〕年詠)

は、アタラシキではなく、「新しき(阿良多之支) 年の始めにかくしこそ千歳をかねて楽しきを経め」(琴歌譜一四・片降)のようなア
ラタシキであることが注意される。尤も、
(注25)

あたらし世の年の名にそへる偉人出でよと嘆く民の声々(一九一三〔大正二〕年詠、「大正の御代の始めに」)
には、アラタ世でなくアタラ世とある。

以上、『新編 左千夫歌集』に見える形容詞の注意される例を挙げて見てきた。前稿(一)などに見た節の短歌と比べて、節の短歌で注意
されるもので節の短歌より古い例が左千夫の短歌に見えることなどが確認できた。

注

- (1) (一)「専修国文」43 [1988・9] (二)「同」44 [1989・2] (三)「日本語学」8-10 [1989・10]

- (2) (a) [1969・12 角川書店]、(b) [1970・1 同]、(c) [1958・6 筑摩書房]、(d) [1957・9 同]
- (3) (一)『国語語彙史の研究』24 [2005・3 和泉書院]、(二)『同』26 [2007・3 同]
- (4) [1980・1 岩波文庫] (第1刷) による。なお、『左千夫歌集』[1928・7 同] (1930・5 再版による) をも参照した。
- (5) (三)「大阪大学大学院文学研究科紀要」45 [2005・3]、(四)『国語語彙史の研究』27 [2008・3 和泉書院]
- (6) (四) [2003・9 東京堂出版]「第六章はもと「馬琴の文語——形容詞カリ活用の場合——」(『国語学』60 [1965・3])・「近世における形容詞補助活用の展開」(『専修国文』57 [1995・8])、第十章はもと「近世に見られる形容詞の分類」(『近代語研究』8 [1990・9 武蔵野書院])、附録はもと「近世における形容詞補助活用の展開(承前)」(『専修国文』58 [1996・1])の一部、(五)「専修大学人文科学研究月報」54 [1967・5]
- (7) 『新編 左千夫歌集』には、斎藤茂吉詠「菅の根の長き春日を書も読まず絵をかき居れば眠むけくもなし」(一九〇七〔明治四〇〕年詠)の例もある。
- (8) 『同志社国語学論集』[1983・5 和泉書院]
- (9) 「燐燐」(略 介夫利 又阿太々介志) (新撰字鏡・享和本)・「あたたけき春の山べに花のみぞところもわかずさきわたりける」(千里集一〇、夫木一四三〇も同様)の例もある。
- (10) 山崎馨氏『形容詞助動詞の研究』[1992・2 和泉書院]、坂詰力治氏「形容詞「いか(厳)し」の消長——「いかめし」「いかめい」との関連から——」(『鎌倉時代語研究』23 [2000・10 武蔵野書院]) など参照。
- (11) 『橋本四郎論文集』萬葉集編 [1986・12 角川書店]、もと「萬葉」24 [1957・7]
- (12) 「萬葉」185 [2003・9]
- (13) 「萬葉」190 [2004・9]
- (14) 前稿(三)に、ウマシサケ「うつそみの腸に染むうまし酒焼酎を盛るぎやまんぞこれ」(吉井勇『天彦』「一九三九〔昭和一四〕年一〇月 甲鳥書林」海南閑吟 あぐら酒、定本吉井勇全集2、一九三八―三九〔昭和二三―二四〕年頃詠)・「美酒(うましさけ)」(咲元酒造〔沖縄県那覇市首里〕製造の泡盛)の例を挙げた。「美味し国伊達な旅」(宮城県)の例をも挙げた。

- (15) 「専修国文」 40 [1987・1]
 - (16) [2005・11 和泉書院] 第二篇第一章第三節、もと「両活用形容詞——重複形容詞との関連から——」(「甲南国文」 42 [1995・3])
 - (17) 鈴木氏^(六)は、他に、浮・日本新永代蔵^(四)や和英語林集成「第三版」の例も挙げられる。
 - (18) 「文学・語学」 105 [1985・5]
 - (19) 第三節に見たアタタケシの「冬^(ニ)もり」歌に「楽焼道人^(七)」とあることから見て、「道人^(八)」は誤りかと思われる。
 - (20) 吉井巖氏編『記紀萬葉論叢』[1992・5 塙書房]
 - (21) 『日本語史の諸相 工藤力男論考選』[1999・8 汲古書院]、もと「国語国文」 42-7 [1973・7]。なお、蜂矢「書評」工藤力男著『日本語史の諸相 工藤力男論考選』(「国語学」 203 [51-3] [2000・12]) 参照。
 - (22) (一)「萬葉」 178 [2001・10]・(二)『国語語彙史の研究』 21 [2002・3 和泉書院]・(三)『同』 22 [2003・3 同]
 - (23) 『講座日本語の語彙』 4 中世の語彙 [1981・11 明治書院]。山田忠雄氏「形容詞スルドシの成立」(「日本大学文学部研究年報」 4 [1954・3]) をも参照。
 - (24) 「抄注・北原白秋第一詩集『邪宗門』語彙」(2003-2004年度科学研究費補助金 基盤研究(C)研究成果報告書『文献に現れた述語形式と国語史の不整合性について』[2005・3])。『邪宗門』には、アヲナリ(邪宗門秘曲)・アヲニ(桑名)の例も見える。
 - (25) 「新しきをみなはめぐし然れどもあを臭き香に魂は消えつも」(一九一三^(九) 年詠)は、アラタシキかアタラシキか、不明である。
- キーワード…補助活用(カリ活用) 未然形ケ・已然形ケ ケシ型形容詞 語幹の用法 ク活用・シク活用
- 〔付記〕 本稿は、二〇〇六～〇八年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2)課題番号一五五二〇二九〇)による研究成果の一部である。

(『国語語彙史の研究』 28 [2009・3 和泉書院] 掲載)

「積ん読」の語誌

岡 島 昭 浩

「つんどく」という語は、丸善に居た内田魯庵が広めていったようである。戸板康二『最後のちょっといい話』（文春文庫）にも、魯庵が丸善の若い社員に「雑読、乱読、大いにやるべし（中略）ツンドクも結構」と言ったと出て来るし、新村出も「魯庵の言ひはじめた文句かと思ふ」と書いている*¹。魯庵全集の随筆評論の巻や、『内田魯庵書物関係著作集』をめぐってみればいくつか用例が拾えるが、「ツンドクの趣味を理解しないものは愛書家で無いのは勿論真の読書家でも亦無い」をあげておこう*²。

西村真次『随筆多角鏡』『讀書と著書』には、「丸善のガクトーによくツンドク先生が何かを書いてゐる」とある。丸善の『學燈』は、かつて『學の燈』とも言ったが（『學燈』を経て現誌名）、その五四号（明治三十四年十一月）に「書籍つんどく者を奨励す」という文が載せてある。魯庵が丸善に入ったのがこの年の九月だから、魯庵の編集による初期のものだが、署名の「風満楼」は、魯庵入社以前の号にも見える名なので、この記事は魯庵によるものではないのだろう。書店の広報誌でツンドクが推奨されるのは当たり前のようだが面白い。ここでは「北雷博士曾て曰へるあり」として、音読・黙読と並べてツンドクをあげており、森銑三『明治東京逸文史』（平凡社東洋文庫）は、「拵えたのは、田尻北雷博士」と紹介している*³。

造語した人について、他の説もある。昭和十一年発行『書物語辞典』の「つんどく」の項には「本を買って積んどく。どくと読の同音から読まずに積んでおくことをしやれたもので和田垣謙三博士の造語」としてある。しかし、この辞典は昭和十三年の再版の際に訂正を付してあり、そこには「つんどくについては、江戸時代すでに、朗読、黙読、積読を三読方と称した」との言がある。江戸時代ということになる、森銑三が「閑読雑抄」（著作集続編第十二巻）で指摘した、『東京新誌』における明治十二年の使用*⁴よりも遡っ

てしまう。

江戸期における「三読方」の例は見いだせていないが、江戸時代末期の学者で蔵書家の村田了阿の逸文集『一枝余芳』（『日本藝林叢書』第八卷）にツンドクの語が見える*5。

やけずとも一切経に用はなしムカシヤクンドクイマ昔者訓読今は積ツンドク而置

は、一切経を三度読んだという了阿であるので、通常のツンドク先生とは異なるが、ツンドクの例である。この了阿の逸文集は三村竹清が編んだものだが、竹清が宿屋飯盛の狂歌

かこう嘉肴あれどその味はひを知らじとて紙魚しめが食らひて見る唐本とうほん

を「つんどく先生座右の銘」としたことも、ついでに書いておこう*6。なお宿屋飯盛は「書」の題で読んでおり*7、ツンドクとは言っていない。

さらに遡る次のような例もある。漸本の『千年草』*8に見えるものである。大般若経を読んでほしいと寺を訪れた男が、御礼の額によって「真読、訓読、転読」などのランクがあることを示されるが、出した額が少なかったために、「ここにつんどく」とされてしまふ。これは本ではなく、お金を積んだものではあるが、「く読」の中に列せられているものである。

「くておく」を「くどく」と言うことがあったとはつきりわかるのも、おおむね、この時代ぐらいからのようである*9。この頃から、いろんな人が、このような洒落を作ったものと思われる。「洒落の多元的発生」であり、誰が作ったとは言えないものであろう。

注

1 全集第九巻「書物の識語」。「ツンドク先生といふ警句がある。私の場合もその所謂ツンドク主義に外ならない」とある。

2 「多忙なる讀書と批評の困難」。改造文庫『魯庵隨筆集（上）』にも所収。

3 見坊豪紀『ことばのくずかご』（筑摩書房）、米川明彦『新語と流行語』（南雲堂）などもこれを引く。

4 小学館『日本国語大辞典』第二版もこの指摘を載せる。

5 岡村敬二『江戸の蔵書家たち』（講談社 一九九六）四〇頁の指摘

- 6 『本之話』、『三村竹清集』第二卷による。「六樹園もかなりてきびしいことをいつたものなり。」と続く。谷沢永一『論より証拠』（潮出版一九八五）二三〇頁も引く。
- 7 野崎左文編『六樹園狂歌集』
- 8 天明八（一七八八）年。『新本大系』第十二卷。
- 9 『浮世風呂』などに見える。

（南陀楼綾繁十積ん読フレンズ『山からお宝 本を積まずにはいられない人のために』
けものみち文庫2〔2008・12 けものみち計画〕掲載）

連体助詞を伴う名詞被覆形による擬古的複合名詞

蜂 矢 真 弓

一 はじめに

有坂（一九三二）は、上代の名詞・動詞において、

(a) エ列イ列に終る形はそれが単語の末尾に立つ場合にも用ゐられ得るもの

(b) ア列ウ列オ列に終る形は、そのあとに何か他の要素がついて一語を作る場合にのみ用ゐられるもの

として(a)を「露出形」、(b)を「被覆形」と名付けた。その上で筆者は前稿（二〇〇六a）において、複合名詞の前項部の場合について、有坂が述べている上代の「被覆形」・「露出形」と、平安時代以降の被覆形形態素・露出形形態素とを合わせて被覆形・露出形として扱い、被覆形・露出形の様相について考察した。

本論文では、前稿（二〇〇六a）で調査の対象としなかった、名詞被覆形による「被覆形＋連体助詞＋名詞」という形態について検討する。¹⁾ 前稿（二〇〇六a）と合わせて、名詞被覆形・露出形の様相をより明らかにすることが、本論文の目的である。

調査対象とする名詞被覆形―露出形は前稿（二〇〇六a）と同様に、二音節の被覆形―露出形は①二七種類・②一四種類の合計四一²⁾種類、一音節の被覆形―露出形は①三種類・②三種類・④三種類の合計九種類とする。

二 「被覆形＋連体助詞＋名詞」の様相

「被覆形＋連体助詞＋名詞」の用例について見てみると、その様相は、通時的に見た時に四種に分けられる。

1 無変化型…「被覆形＋連体助詞＋名詞」から他の形態に変化しないもの

2 連体助詞着脱型…「被覆形＋連体助詞＋名詞」―「(同じ) 被覆形＋(同じ) 名詞」

3 露出形対応型…「被覆形＋連体助詞＋名詞」―「(被覆形に対応する) 露出形＋連体助詞＋(同じ) 名詞」

4 連体助詞着脱・露出形対応型…「被覆形＋連体助詞＋名詞」―「(被覆形に対応する) 露出形＋(同じ) 名詞」

変化しない1に対し、変化するものにはまず2・3があり、2・3の混合型として4があるということである。そして、このうち2

・3・4については、それぞれ以下の二類がある。

2 a 「被覆形＋連体助詞＋名詞」↓「(同じ) 被覆形＋(同じ) 名詞」

2 b 「被覆形＋連体助詞＋名詞」↑「(同じ) 被覆形＋(同じ) 名詞」

3 a 「被覆形＋連体助詞＋名詞」↓「(被覆形に対応する) 露出形＋連体助詞＋(同じ) 名詞」

3 b 「被覆形＋連体助詞＋名詞」↑「(被覆形に対応する) 露出形＋連体助詞＋(同じ) 名詞」

4 a 「被覆形＋連体助詞＋名詞」↓「(被覆形に対応する) 露出形＋(同じ) 名詞」

4 b 「被覆形＋連体助詞＋名詞」↑「(被覆形に対応する) 露出形＋(同じ) 名詞」

こちらも同様に、2 a・3 aの混合型が4 a、2 b・3 bの混合型が4 bとなる。

そのうち2 a・3 a・4 aは、しいて言うならば自然な「変化」であると考えられる。まず、2 aについては、後から連体助詞が挿入されるのは自然ではないので、連体助詞が脱落する方が自然な「変化」であると思われる。次に、3 aについても、前稿(二〇〇六 a)の第三節・第四節に述べたように、基本的に時代が下るにつれて被覆形の勢力が弱くなっていき露出形の勢力が強くなっていくこと、及び、複合語の前項部が同じ語の被覆形と露出形の両方をとる例において、被覆形の例の後に露出形の例が出現するということから、「被覆形→露出形」も自然な「変化」であることが分かる。そして、4 aは2 a・3 aの混合であるので、同様であると見られる。それに対し、2 b・3 b・4 bの「被覆形＋連体助詞＋名詞」は、擬古的な表現をするために2 a・3 a・4 aの「変化」のシステムに「類推」した意図的な表現であると考えられる。「類推」は「変化」よりも後になるため、後に例を挙げるように、2 b・3 b・4 bの「被覆形＋連体助詞＋名詞」の出現は時代が下り、基本的に江戸時代以降に出現する。

このように分類すると、2 a・3 a・4 aの「変化」は、それぞれ2 a「連体助詞脱落型」、3 a「露出形変化型」、4 a「連体助詞脱落・露出形変化型」と呼ぶことが出来、2 b・3 b・4 bの類推は、それぞれ2 b「連体助詞装着型」、3 b「被覆形類推型」、4 b「連体助詞装着・被覆形類推型」と呼ぶことが出来る。

そして、2 aと4 aに分類される例は以下の通りである。

2 a

〔連体助詞ナ〕

マナジリ〔眦・眚〕↓マジリ〔眦・目尻³〕、マナカブラ〔眶〕↓マカブラ、

マナブタ〔瞼〕↓マブタ〔瞼・目蓋〕

〔連体助詞ノ〕

コノクレ〔木暗・木暮・木晩〕↓コグレ〔木暗・木暮〕、イナノホ〔稻穂〕↓イナホ

3 a

〔連体助詞ノ〕

コノハ〔木葉〕↓キノハ、コノミ〔木実〕↓キノミ、コノメ〔木芽〕↓キノメ

4 a 該当無し

では、「変化」の例についての検討は別の機会に述べることにして、本論文では、まずは「類推」の2 b・3 b・4 bについて考察することにする。その結果、以下の通り、4 bのみ、該当する例があった。⁴

4 b 連体助詞装着・被覆形類推型

〔連体助詞ナ〕

タナクビ〔手頸〕↑テクビ〔手首・手頸〕

…郎黨^{ちやうだう}四五人、物蔭^{ものかげ}より走り出^{はし}て、忠重^{ただしげ}が左右^{さう}の手首^{たなくび}を、しかと捉^{とらへ}て動^{うご}せず、…

（曲亭馬琴『椿説弓張月』後篇卷之二 第十九回）

Tecubi テクビ (手首) 手首。

(『邦訳日葡辞書』)

タナモト〔手元〕↑テモト⁽⁵⁾

折しもあれ一團の燐火、叢の中より燃出て、手元を照らすにぞ、秋の螢か鬼火かと怪しみながら、やうこそあらめとて驚たまはず。

(曲亭馬琴『椿説弓張月』後篇卷之六 第廿九回)

八尺余りの金さい棒の八角なるを手本二尺許り円めて、誠に輕げに引つ下げたり

(土井本『太平記』)

タナサキ〔手先〕↑テサキ

さのみ逃脚すみやかに、わが手先を逸れぬとも、天なる父のあざけりを、聞きのがるべき汝が身かは。…

(薄田泣菫『二十五絃』「天馳使の歌」「なかだえ」)

テサキ
手先

(『文明本節用集』)

マナサキ〔面前〕↑メサキ

義成是をうち聞て、件の生拘技太郎を、そが俣面前に牽居させて、…

(曲亭馬琴『南総里見八犬伝』第九輯卷之三十四下 第百五十八回)

其時は我三歳なれ共、面影は目先に残り、見覺有眉間のほくろ、隠してもかくされまじ。

(浄瑠璃『二谷嫩軍記』)

これらの用例は、江戸時代以前に存在していた「被覆形+連体助詞+名詞」の例に類推して、「露出形+名詞」を元に、江戸時代以降に「被覆形+連体助詞+名詞」の形態を作り出したものと捉えられる。

そして、江戸時代以降に作り出された「被覆形+連体助詞+名詞」の形態の例は、4bのみでなく、実は1無変化型としておいたものの中にもある。よって、このような1の例を、「類推」によるものということで1bとし、それ以外の1の例を1aとすることにする。では、以下に1bの例を挙げる。

1b

〔連体助詞ナ〕

タナユビ〔手指〕

…五扁唱てしづやかに、手指左右に相組で、その間よりこれを見れば、…

(曲亭馬琴『椿説弓張月』後篇卷之一 第五十八回)

タナマタ〔手股〕

…遽しく手をさし伸て、件の珠を受んとせしに、珠は手股を漏て、…

(曲亭馬琴『南総里見八犬伝』第二輯卷之三 第十六回)

タナナカ〔手中〕

…緩くは握れど、きみが掌中には、盡ぬ終らぬ平和と至善…

(北村透谷『蓬萊曲』第三齣 第一場「仙姫洞」)

マナウチ〔眼中〕

…或は人千金の、利をもて求ることありとも、この虎の眼中に、聊も点すべからず。

(曲亭馬琴『南総里見八犬伝』第九輯卷之二十六 第四百四十一回)

マナウヘ〔眼上〕

…搔抓み、「耶」と声かけて、眼上約莫一丈あまり、蹴鞠の像く投たりしを、…

(曲亭馬琴『南総里見八犬伝』第九輯卷之十二下 第一百十五回)

マナサヤ〔目靨〕

…これより後は由断せず、目靨外して護る程に、そがひとりへもよらせねど、

(曲亭馬琴『南総里見八犬伝』第三輯卷之二 第二十四回)

マナソコ〔眼窩〕

世間の婦人ハ眼窩に入らざれども、此の才女の爲めにハ心を動かさざるを得ず。

(末廣鐵腸『政治小説雪中梅』下編 第一回)

マナナカ〔眼中〕

…かたくは閉づれどきみが眼中には、不老不死の詩歌と權威をあつむるとぞ見ゆる…

(北村透谷『蓬萊曲』第三齣 第一場「仙姫洞」)

マナウラ〔眼裏〕

だが眼裏の奥に揺曳している父娘の残像が、どうしても拭い去れなかった。

（沢田ふじ子『天涯の花』）

〔連体助詞ノ〕⁽⁹⁾

コノエ〔木枝〕

…樹枝を折て鞭としつ、繫置れし魍魎児們を、鞭撻責ん、と立蒐れば、…

（曲亭馬琴『南総里見八犬伝』第九輯卷之七 第四百回）

コノエダ〔木枝〕

…被たる襦袢の片袖の、樹枝に膝みて断離れしを、そが俣にして逃亡たる、…

（曲亭馬琴『南総里見八犬伝』第八輯卷之五 第八十四回）

コノミキ〔木幹〕

…晋五は嚮に道節に、射られて虜になりし折、谷山の麓なる、樹幹に杻結着られて、…

（曲亭馬琴『南総里見八犬伝』第九輯卷之二 第九十五回）

これらの例は、4 bのように元となる「露出形十名詞」がある訳ではないが、三単語である「〈露出形〉＋〈連体助詞〉＋〈名詞〉」から作り出したものである。例えば、「タナユビ〔手指〕」を例に挙げて説明すると、三単語「テノユビ（手の指）」を念頭に置いた上で「タナユビ〔手指〕」という形態を作り出したということである。因みに、「テノユビ（手の指）」のような例があると、1 bではなく3 b被覆形類推型のようにも見えるが、「テノユビ（手の指）」のような例は、あくまで三単語であって複合語ではないので、3 bではなく1 bの所屬となる。

三 「一音節ア列十ナ名詞」と「コ十ノ十名詞」

4 b連体助詞装着・被覆形類推型および1 bの例を見ると、「一音節ア列十ナ名詞」・「コ十ノ十名詞」の二種類の形態が見られる。そこで、まずは「一音節ア列十ナ名詞」の形態について考えるために、連体助詞「ナ」についての辞書の解説を見てみる。

「の」の母音交替で、(略)奈良時代にすでにわずかしき用いられないもので、後世は、いくつかの名詞に固定的に使われただけであった。

手・目^テの交替形タ・マ、瓊^ニ・神^{カミ}の交替形ヌ・カムなど単独では使用されない語形につくことがしばしばあり、上代において既に固定して語構成要素化していたと思われる。

『時代別国語大辞典上代編』の「な」の項

これらによると、連体助詞「ナ」は、名詞の被覆形に付くことが多く、上代語において語構成要素としてのみ存在していたというのである。そこで、辞書の記述を受けて、連体助詞「ナ」が露出形に付いて語構成要素として存在した例を探してみたところ、一例も見付からなかった。このことから、「被覆形十十名詞」という形態はあるが、「露出形十十名詞」という形態はないということが分かる。

筆者は、前稿(二〇〇六a)において、名詞被覆形による複合名詞の前項部の場合について、被覆形と露出形の異なり語数と延べ語数の表を作って検討し、時代が下ると共に、被覆形の勢力が弱くなっていき、露出形の勢力が強くなっていくことを明らかにした。このことを、「被覆形十十名詞」はあるが「露出形十十名詞」はないということと合わせて考えると、連体助詞「ナ」は、露出形よりも古い被覆形に下接する古い連体助詞であることが分かる。よって、4b・1bの「一音節ア列十十名詞」は、擬古的な表現をするために、過去に存在した古い連体助詞「ナ」を用いたものと考えられる。

さらに、連体助詞「ナ」に上接する被覆形について考えるために、詳細については別稿に述べたいが、1a・2a・3a・4aにおける「名詞被覆形十十名詞」の形態の例を見ると次のようである。

タ〔手〕……タナスエ〔手末〕・タナソコ〔手底・掌〕・タナウラ〔掌中・掌〕・タナゴコロ〔掌〕

マ〔目〕……マナカヒ〔眼間・目交〕・マナカミ〔目上〕・マナコ〔眼〕／マナジリ〔眦・眚〕・マナカブラ〔眶〕・マナブタ〔瞼〕

ヌ〔瓊〕……ヌナト〔瓊音〕(↑ヌナオト)・ヌナキ〔淳名井〕

これを見ると、右の連体助詞「ナ」に上接する被覆形は、主に一音節ア列であることが分かる。そのため、擬古的な表現をする際に、「一音節ア列十十名詞」という形態が用いられたものと思われる。

次に、「コナノ十名詞」の形態について考える。筆者は、前稿(二〇〇六b)において、露出形「キ〔木〕」に対する被覆形「コ

「木」の勢力は、室町・戦国時代に完全に逆転されると述べた。このことから、江戸時代以降、「コ〔木〕」は「キ〔木〕」よりも古いものという意識が徐々に芽生え始め、その結果、擬古的な表現をするために「コ〔木〕」が用いられたものと思われる。

一方、用いられた連体助詞が「ノ」であった理由について考える。「一音節ア列十十名詞」のように、古い連体助詞「ナ」を用いた方が、より擬古的要素が強まるはずである。そこで、一音節オ列に下接する連体助詞について考えるために、1a・2a・3a・4aにおける「一音節オ列十連体助詞十名詞」の形態の例を見ると次のようである。

コ〔木〕……コヌレ〔木末〕(↑コノウレ)・コノシタ〔木下〕・コノハナ〔木花〕・コノマ〔木間〕・コノモト〔木下〕／

コノクレ〔木暗〕・木暮・木晩〕／コノハ〔木葉〕・コノミ〔木実〕・コノメ〔木芽〕

ホ〔火〕……ホノホ〔炎〕

このように、一音節オ列の被覆形に下接する連体助詞は「ノ」のみである。故に、「コ」に下接する連体助詞は「ノ」のみであることから、「コ十十名詞」という形態が用いられたものと思われる。

では、最後に、「類推」における「一音節ア列十十名詞」と「コ十十名詞」とを比較する。この二つの形態において、擬古的要素は、それぞれ〈連体助詞「ナ」〉と〈被覆形「コ〔木〕」〉である。よってこの二つを比較してみる。

〈連体助詞「ナ」〉は、上代にのみ語構成要素として存在していたもので、平安時代には衰退してしまっていたものである。江戸時代以降では、完全に過去のものという意識になる。それに対し、〈被覆形「コ〔木〕」〉は、室町・戦国時代以降勢力が弱まっていくなかであって、江戸時代以降も現代に至るまでずっと存在している。〈連体助詞「ナ」〉に比べれば、あまり過去のものという意識にはならない。よって、「一音節ア列十十名詞」の方が「コ十十名詞」よりも擬古的要素が強く、そのため、「一音節ア列十十名詞」は、江戸時代・近・現代の六文献において4b・1bの一三例があるのに対し、「コ十十名詞」は、江戸時代の一文献において1bの三例があるのみという結果になったものと考えられる。

注

(1) 「被覆形十連体助詞十名詞」という形態の用例には、出現する文献の傾向があまり見られないようである。それで、『日本国語大辞典 第

二版』、国文学研究資料館の日本古典文学本文データベース、『新編国歌大観』CD-ROM版 Ver. 2 (角川書店) を中心に調査した上で、その他の文献についても調査することにした。

- (2) 前稿(二〇〇六a)では、有坂(一九三二・一九三四)と川端(一九七九)が挙げている①ア列―エ列乙類、②ウ列―イ列乙類、③オ列甲類―イ列乙類、④オ列乙類―イ列乙類の被覆形―露出形のうち、(1)被覆形が形容詞の語幹でもあるもの、(2)被覆形・露出形の両方に固有名詞の用例しかないもの、(3)被覆形が、動詞の被覆形であるもの、(4)少なくともどちらか一方が、単独、または複合語の後項部の例のみであるもの、(5)露出形の語末の母音が甲類であるもの、(6)その他、を除くこととし、その結果、調査対象とする名詞被覆形―露出形を以下の通りとした。なお、(1)により「クロ〔黒〕」「クリ〔涅〕」を調査対象外としたことによって、明らかに有坂(一九三一・一九三四)の③に該当するものはないことになった。甲乙不明のため③・④のどちらであるかが分からないものについては、④に含めである。(波線部は一音節の被覆形―露出形)

①アマ〔天〕―アメ、アマ〔雨〕―アメ、ウハ〔上〕―ウヘ、ウラ〔末〕―ウレ、カガ〔影〕―カゲ、カザ〔風〕―カゼ、カナ〔金〕―カネ、サカ〔酒〕―サケ、スガ〔菅〕―スゲ、タタ〔楯〕―タテ、ツマ〔爪〕―ツメ、タ〔手〕―テ、フナ〔舟〕―フネ、マラ〔稀〕―マレ、ムナ〔胸〕―ムネ、マ〔目〕―メ/イナ〔稲〕―イネ、カ〔毛〕―ケ、コワ〔声〕―コエ、サナ〔核〕―サネ、タカ〔竹〕―タケ、タタ〔縦〕―タテ、タナ〔種〕―タネ、ツマ〔頭〕―ツメ、ナハ〔苗〕―ナヘ、ニハ〔贅〕―ニヘ、ヒラ〔領巾〕―ヒレ、ヤカ〔家〕―ヤケ、ヨナ〔米〕―ヨネ、ワサ〔早稲〕―ワセ

②ウツ〔内〕―ウチ、カム〔神〕―カミ、クツ〔口〕―クチ、クル〔栗〕―クリ、サツ〔獲〕―サチ、ツク〔月〕―ツキ、ツク〔槻〕―ツキ、ヌ〔瓊〕―ニ、ム〔身〕―ミ/カブ〔芽〕―カビ、クク〔茎〕―クキ、クス〔串〕―クシ、クヌ〔国〕―クニ、タブ〔粒〕―タビ、ツ〔茅〕―チ、ツク〔調〕―ツキ、ツブ〔粒〕―ツビ

④コ〔木〕―キ、ホ〔火〕―ヒ/ノ〔荷〕―ニ

また、用例を採取する際にも、前稿(二〇〇六a)同様、被覆形または露出形の部分が確例でないもの、固有名詞は採取しない。

- (3) 「メジリ〔目尻・眚〕」については別の機会に述べることにする。

- (4) 3bの形式に当てはまる例として、「コノミチ↑キノミチ」があるが、「コノミチ」は以下の一例のみで、「キノミチ」と同じ意味である

かどうか判断出来ないので検討の対象としないことにする。

コノミチ「木道」^{コノミチ}「木道」(『書言字考節用集』第四冊(人倫四))

キノミチ「つくもつかさのたくみのさまくきのみちをえりすへたる様にのみ。」(『民部卿家歌合 建久六年正月廿日』)

- (5) 本来「タモト」は①手の届く辺り・②袖の両方の意味を表していたが、下ると分化して「タモト」が②、「テモト」が①の意味を表すようになり、その後①の意味を表す「タナモト」が発生した。一見「タナモト」は2bにも所属するように見えるが、このことから、①の意味を表す「タナモト」は4bのみの所属であるということが分かる。

タモト「袂」秋の野の草のたもとか花すゝきほにいでてまねく袖とみゆらん」(『古今和歌集』巻第四 秋歌上 二四三 ありはらのむねやな)

- (6) 「ウ」の脱落形「マナチ」の例もある。

マナチ「眼内」^{いくたひ}「…幾番となく眼包^{まがた}を拊^{なう}れば、撫^{なう}るまにく銷然^{せうねん}と、眼内^{まなち}の邪熱退^{じやねつしりぞきさめ}冷て、…」(曲亭馬琴『南総里見八犬伝』第八輯 卷之二 第七十六回)

- (7) 「メウヘ」という例もあるが、「マナウヘ」と「メウヘ」は意味が異なるため「マナウヘ」は1bの所属となる。

メウヘ「目上」「いちこ「アイく目下^{めした}かエ」妻「イエ目上^{めうへ}でございます」(『浮世床』二編上)

- (8) 「メナカ「目中」」という例もあるが、「マナナカ」とほぼ同時期の例である上に孤例であるため、「マナナカ」は4bではなく1bの所属にしておく。

メナカ「目中」「…女將^{をかみ}の大きな目^めなかぎ、ギラく^{おほ}と潤^{うる}んでゐるのに…」(里見弴『今年竹』「渡る風」七)

- (9) 1bに当てはまる例として「ツブノキ」があるが、「ツブ「粒」」が被覆用法だけでなく露出用法も持っているため、「ツブノキ」は三単語である可能性があることから検討の対象としないことにする。

ツブノキ「粒木」^{ツブノキ}「木櫛^{ツブノキ}樹^レ毛^出」(『書言字考節用集』第六冊)

『椿説弓張月』（日本古典文学大系 岩波書店）、『邦訳日葡辞書』（岩波書店）、『土井本太平記 本文及び語彙索引』（勉誠出版）、『土井晩翠 薄田泣菫 蒲原有明集』（明治文学全集58 筑摩書房）、中田祝夫『文明本節用集研究並びに索引』（勉誠社）、『南総里見八犬伝』（新潮日本古典集成別巻 新潮社）、『^{海音半二}出雲宗輔傑作集 全』（有朋堂書店）、『北村透谷集』（明治文学全集29 筑摩書房）、『明治政治小説集（二）』（明治文学全集6 筑摩書房）、『天涯の花―小説・未生安一甫』（中央公論社）、中田祝夫・小林祥次郎『書言字考節用集研究並びに索引』（勉誠社）、『続群書類従第十六輯下 和歌部』（続群書類従完成会）、『古今和歌集』（日本古典文学大系 岩波書店）、『浮世床 四十八癖』（新潮日本古典集成）、『今年竹』（プラトン社）

【使用辞書】

『日本国語大辞典 第二版』（小学館）、『岩波古語辞典 補訂版』（岩波書店）、『時代別国語大辞典 上代編』（三省堂）

【参考文献】

有坂秀世（一九三二）「国語にあらはれる一種の母音交替について」

（一九三四）「母音交替の法則について」

（『国語音韻史の研究 増補新版』 一九五七 三省堂）

川端善明（一九七九）『活用の研究』Ⅱ（一九九七 清文堂出版）

鈴木丹士郎（二〇〇三）『近世文語の研究』（東京堂出版）

蜂矢真弓（二〇〇六a）「名詞被覆形・露出形の型の通時的相違」（『国語語彙史の研究』二十五）

（二〇〇六b）「名詞被覆形「コ」〔木〕の様相」（『語文』第八十六輯）

（大学院後期課程学生）

キーワード…被覆形 露出形 連体助詞 擬古 類推

（『待兼山論叢 文学篇』41 [2007・12] 掲載）

抄注・北原白秋第二詩集『思ひ出』語彙

前報告書『文献に現れた述語形式と国語史の不整合について』掲載の「抄注・北原白秋第一詩集『邪宗門』語彙」に引き続き、北原白秋の第二詩集『思ひ出』[一九一一「明治四四」・六 東雲堂書店]の中から(参考までに、増訂新版[一九二五「大正一四」・七 アルス]の増補をも見る)、いくらかの注意される語(動詞、形容詞、情態副詞、名詞)を蜂矢真郷(企画)が拾い、それらについて各自が分担して述べる。前報告書は「述語形式」についてであったので、名詞を拾うことをしなかったが、本報告書は「語彙・語法」についてであるので、若干の名詞をも対象とした。

担当者は、蜂矢真郷の他、藤本真理子・清田朗裕・竹村明日香・蜂矢真弓である。

枠で囲んで示す白秋の詩の引用は、『白秋全集』2 詩集2「一九八五・四 岩波書店」による(ページ数もそれによる「261ページ以降は、「増補」部分である」)。

なお、前報告書に『邪宗門』の語彙について見た際にとり挙げた語が『思ひ出』にも見えるものがあるので、『思ひ出』の例を(補遺)として挙げておく。

アサスズ

梨

ひと日なり、夏の朝涼、
濁酒 売る家の爺と

その爺の車に乗りて、
市場へと。——途にねむりぬ。

(略)

(120ページ)

アサスズ「朝涼」の例は、江戸時代以降のものが見える。

朝涼 夏時朝の内の涼しき時に人の方へ適^(ゆく)をアサスゞニゆく
と云(俚言集覽)

朝涼に菊も一般通りけり(一茶・七番日記)

朝冷はいつしか過ぎて日かげの暑くなるに、(樋口一葉「たけくらべ」六)

形容詞スズシはシク活用である。シク活用形容詞は、シを含む語幹が複合語・派生語を構成する語構成要素となるのが通常で、シを含まない語基が語構成要素となるシク活用形容詞は、林浩恵氏「上代における形容詞語素とニ——なぜク活用形容詞語素は単独でニを伴わないか——」(『萬葉』一九四「二〇〇六・三」)が述べられるように、上代ではアラタシ・オダヒシ・ケシ・タダシ・ニタシ・ヒサシ・マサシなどにほぼ限られている。ここにスズシが挙げられていないのは、語基スズが語構成要素として用いられる例の時代が下るからである。

室町時代には、スズケ「涼氣」「納^ニ微涼トハ、アマリアツイホドニ、ザシキヲアケハナイテスズケヲ入レタゾ、」(詩学大成抄五)、スズスズ「涼々」「イマダタ立ハ来ラネドモ、マツサキバシリニ清風ガザゞメキワタリテ、暑氣ヲコトゞク吹醒シテ、スゞくトナルゾ」(中華若木詩抄^三)が用いられ、江戸時代には、スズカゼ「涼風」「すゞ風や我より先に百合の花」(俳諧・猿蓑^二)や、先に挙げたアサスズ「朝涼」などが用いられるようになる。

シク活用形容詞が接尾辞を伴って動詞化する場合に、カナシブなどのように、語幹シ+接尾辞の形をとるのが通常であるが、スズシの場合は、スズム「釣^{つり}殿にてけふ涼^{すゞ}ませ奉^{たてまつ}らん」(宇津保物語・祭の使)のように、語基シ+接尾辞の形をとるので、語基スズがある程度の独立性を持っていると見られて、それ故に、下るとアサスズ「朝涼」を含むスズケ「涼氣」以下のような例も見えるようになったものであらうと考えられる。

(蜂矢真郷)

アザム

断章／六

あはれ友よ、わかき日の友よ、
今日^{けふ}もまた街^{まち}にいでて少女らに面染^{おもて}むとも、
な嘲^{あざ}みそ、われはなほわれはなほ心をさなく、
やはらかき山^{やま}羊の乳の香のいまも身に失せもあへねば。

(65ページ)

今日よりは

けふ
今日よりは汝と遊ばじと

ふたり
二人して友はかへりぬ。

あかあかと野辺に風吹き、

はるかなるわが家のけむり

酒倉の冷やき長壁、

なべてみな暮れて嘲みき。

けふ
今日よりは汝と遊ばじと。

(268 ページ、補遺)

アザム「嘲」は、アザケル「嘲」と同様に「あざける、そしり笑う」意をもったアサム「浅」が、アザケル「沙弥聞輕咲皆（皆阿佐毛リ）」（日本霊異記・上十九・興福寺本）など（アザムク「欺」・アザワラフ「嘲笑」）との類推によつて濁音化した動詞だと考えられる。

まず、清音アサムは、『大言海』に「アサ（浅）の動詞化」とあるように、形容詞語幹アサ「浅」+ムという構成と考えられる。同様の例として、「赤む」「鈍む」「強む」「暗む」等が指摘できる。アサムは、『日本国語大辞典』（第二版）によれば「驚きあきれる」「軽蔑する」等の意をもつとされるが、当該の漢字表記にみえる「嘲る」意は記述されていない。

…おどろきあさむ気色も見せず。（浜松中納言物語）

…世のなかの人のあさみきこゆることよ。（更級日記）

しかしながら、日葡辞書には、次の記述がみえる。

+Asami, u, ōda. アサミ、ム、ウダ（浅み、む、うだ）あ

る物について、それを見たあとで、最初に思っていたよりも劣っていると考える。『また、時としては、嘲る、の意。

（邦訳日葡辞書・補遺、三四頁上）

アサムは「時としては、嘲る、の意」とある。この記述から、少なくとも中世にはアサムはアザケルと意味的な類似があつたことが指摘できる。そして、この記述通り、近世には「嘲る」意でアザムと濁音化した次のような例が確認できる。

「…われ潜に信じて、その人を俟たるを、汝たちあざみ笑ひしが、今日の事思ひあたるべし。…」（椿説弓張月・上）

以上のことから、アサムはアザケルと意味的な類推を経た上で、濁音化を生じたと考えることができる。このように、類推によつて濁音化が生じた例は、亀井孝氏「ソソク／＼ソング（Excursus「美那曾曾久」について）」（『国語と国文学』二四―七（一九四七年））等で指摘されている。

なお、近代詩歌では『思ひ出』に先行して次の例が確認できる。こころ懲りぬ御兄なつかしあざみては博士得ませと別れし人も（与謝野晶子「恋衣」曙染（一九〇五年））

(清田朗裕)

アヲニブシ

断章／三十四

ああ、あはれ、

青にぶき救世軍の

汚よごれたる硝子戸のまへに

向日葵ひるま咲き、

濠端ほりばたを半纏はんてんひとりペンキ壺さげて過ぎゆく。

いづこにか物売の笛

ああ、ひと目——日の夕、

われはいま忙せはしなの電車より。

(78ページ)

佐竹昭広氏「古代日本語に於ける色名の性格」(『国語国文』二四—六)において、「上代の日本語の色名」であったと認められるアカ、シロ、アヲ、クロの四色は、「何れも二音節という日本語として最も基本的な音節数より成り、更にこれらが形容詞の語幹に立っている」という特徴を有している。

では、アヲニブシはというと、これには二通りの語構成が考えられ、一つには「アヲ+ニブシ」、もう一つは色名アヲニビの形容詞化である。前者の形容詞ニブシに関しては、何らかの影響はあったとみてよいであろう。後者の色名アヲニビには次のような例が見られ、アヲニビの変化したアヲニブの形も確認できる。

アヲニビ 菊の気色あはればめる枝に濃きあをにひの紙なる文つて
(源氏物語・葵)

アヲニビイロ それもおり物のあをにびいろの指貫、狩衣きて、廊のほどにて馬にのりぬ。(更級日記)

アヲニブ 人々しき人のおとなびたるが、あをにふの指貫、綿入りたる白ききぬどもあまた着て(前田本枕草子・一九八)

色名ニビ「鈍」については、「鈍色になる」という意の動詞ニバムも確認でき、同じく色名にムという構成を持つ先のアカ、シロ、アヲ、クロの四色との共通点でもある。

ニビ あるかなきかなる薄にび、あはひも見えぬきぬなどばかり、あまたあれど(枕草子)——ニバム よき童の、こまやかににばめるかざみのつま、頭つきなどほの見えたり
(源氏物語・柏木)

アカ 復アカノヨリイ緋線(を)以て之(を)纏ひ(高野山大学図書館蔵蘇悉地羯羅經中寛弘五年点・曾田文雄氏釈文)——アカム

九の君、おもてはあかみてうちほほゑみ給て（宇津保物語・嵯峨院）

クロ からすぎきはまのこいしと思ふかなしろもまじらぬすが島のくろ（山家集一三八四）―クロム くれなゐのくろむまで、濃きからあやのうちあはせ一かさね（宇津保物語・楼上下）

このように、アヲニブシはニビに対する形容詞ニブシの影響もありつつ、色名アヲニビの変化したアヲニブの形容詞化と見るのが自然であろう。

（藤本真理子）

コユキ「粉雪」

銀 笛

（略）

そこはかと粉雪ふり、

梅の花黄になげく

その苑の、

身のいたき衰弱や。

（略）

（95ページ）

コナ「粉」は、元々はコ「粉」であった。「小さい物、細かい物」という意味のコがあり、コ「小」とコ「粉」とに分化する。そして、コ「粉」は江戸時代まで下るとコナ「粉」に変化して行き、現在に至る。阪倉篤義氏『日本語表現の流れ』（岩波セミナブックス45 一九九三）は、単音節語は「同音衝突」という事態を招かざるをえなかったため、「この混同を防ぐ手段として（略）必要なもののみを残して他は（略）単音節語を、既存あるいは改修の複音節語に置き換えるという方法」を取ったとされる。コの場合もこれと同様に、コ「小」を残して、コ「粉」は複音節語のコナ「粉」に変化したのではないかと考えられる。

コ「粉」 淤泥（略）倭云比地乃古（新訳華嚴經音義私記） 法花經

并鉢干飯粉等 與優婆塞（粉コ）（日本靈異記・下・真福寺本）

コナ「粉」 くだけひしげたるをくはんとうにはこなにする
といふ 粉科の義か（男重宝記・五・二）

右のようなコ「粉」↓コナの変化に伴い、コユキ「粉雪」↓コナユキの変化が、白秋以前に起こっている。つまり、白秋はコナユキ「粉雪」の時代に意図的にコユキ「粉雪」と表現したことになる。擬古的な意味合いを出すためであったものと考えられる。

コユキ「粉雪」 ふれくこゆきといわけなき御けはひにて

仰らるゝ（讃岐典侍日記・下）「ふれくこゆき、たんばのこゆき」といふ事、米つきふるひたるに似たれば、粉雪

といふ（徒然草・百八十一段）

コナユキ「粉雪」 雪 雪綿 粉雪 雪おこし（便船集・巻

七・四季詞） 三月こな雪ふりしきる（室生犀星『抒情小

曲集』一部（故郷にて）三月）

便船集の例は『日本国語大辞典』（第二版）による。金沢近世

語研究会編『便船集索引』では、確例か否かが確認出来なかった。

なお、白秋にはコユキ「小雪」「大雪、小雪、雪のふる晩に、

…」（童謡「雪のふる晩」）の例も見られる。

（蜂矢真弓）

チラボフ

断章／四十八

なにゆゑに汝は泣く、

あたたかに夕日にほひ、

たんぽぽのやはき溜息野に蒸して甘くちらぼふ。

さるを女、

なにゆゑに汝は泣く。

（84ページ）

チラボフの初出は、『日本国語大辞典』（第二版）によると『詞葉新雅』（一七九二〔寛政四〕）のようである。

チラバウテアル ちりほひたる（ち部）

ここに雅語に当てられたチリボフは、散ルの派生語であり、散乱するという意味で中古から用例がある。

みちのくに紙の畳紙のほそやかなるが（中略）几帳のもとに散りぼひたり。（枕草子・七月ばかりいみじう暑ければ）

「己ハ狐也。（中略）只、『此ル所ニハ自然ラ食物散ボフ物ゾ

カシ』ト思テ（後略）」（今昔物語集・二十七・四十）

チラメクも、後に、散ルから派生したと見られる。

「やいくさいせんより、某が目あたりを、ひらりくと

ちらめくが、何ものぞやひ」（虎明本狂言・朝比奈）

散ル―チリボフ―チラメクと同様の対応に、寄ル―ヨロボフ―

ヨロメクがある。擬態語を有する点でも両者は共通する。

徒（倚）タ、ズム ヨロボフ（観智院本類聚名義抄・仏上五才）

俊燈（略）蠅輪（略）透迤（略）（書言字考節用集・十、言

辞八下）

霏々（略）霏々（略）（同・九、言辞八上）

ヨロヨロ―ヨロボフから類推が働き、チラチラからチラボフが生じたとも考えられる。

さらに近世末期にはチラバルが現れ、明治期には使用が一般的になった。近代でのチラボフは、チラバルとチリボフの混淆の可能性もあると思われる。

なお、近代詩でのチラボフの初出は、上田敏訳『海潮音』（一九〇五〔明治三八〕）である。

水の面の月影なして／波の上の楫の音なして／わが胸に吐息
ちらぼふ。（アルベエル・サマン「伴奏」）

白秋作品では、『邪宗門』でも使用されている。

そのもとにあまりりす赤くほのめき、／やはらかにちらぼへ
るへリオトロオプ。（「室内庭園」）

（竹村明日香）

ナヨル

恐怖

（略）

乳母なれど、いまでも恐れぬ。

疑問に悲しみ乱れ、

わが泣けば馴（な）寄り水如（な）し、

『吾（あ）子よ、吾（あ）ぞ。』（夜は二時ならし。）

『汝（な）が母。』と――青き顔しぬ。

（140ページ）

ナヨルは、ナレヨル「馴（な）寄」を約めてできた語と見られる。

「親しく近寄る」の意味をもつナレヨルは、ナヨルに先立って、以下の用例が存在する。

今は御こと教へたてまつり給ふにさへことつけて、近やかに
なれより給ふ（源氏物語・常夏）

橘の香をむつましみなれよらむ花の姿も折りて見るべき（輔
親集・一三二）

一方、ナヨルでは、鎌倉時代の次の例が最も早い。

故郷の月ふく風になよ竹のなよりあひてもいく夜へぬらん

（仙洞句題五十首・一五〇）

この例は、序詞に「なよ竹の」とあることからナヨルの形態をとつたものと考えられる。

ナレヨル「馴（な）寄」↓ナヨルの変化と同様にとらえられる可能性のあるものに、ナレシム「馴（な）染」↓ナジムがある。『日本国語大辞典』（第二版）に「馴（な）れ染む」の変化した語という」とある。

ただ、ナレシムの例は確認できない。ナジムは、平安後期に

夢に見てあかずさめけむおもかげをうつつのちよになじみて

しかな（兼澄集一〇二）

の例がある。

なお、近代詩歌では、白秋の『思ひ出』以前に、若山牧水がナヨルを用いている。

君は知らじ君の馴寄るを忌むこときはかなごころのうらさび

しさを（若山牧水『海の聲』（一九〇八）〔明治四二〕文潮社、

若山牧水全集第一巻、誠進社）

（竹村明日香）

ノドニ

断章 / 四十三

葬式とらひの帰途かへきにか、戯れに笛吹き鳴らし、

もの甘き靄なれの内ささめきてたどる楽師よ。

哀れ、汝ら、

薄ぐらき路次の長屋にひと時の後やあるらむ。

さはれなほ吹き鳴らし長閑のどに消えつつ、

うら若き服の鄙びのいろ赤く、なにか眺むる。

日はしばし夢の世界に目を放つ、黄金の光。

（82ページ）

ノドニは、上代に例がある。

明日香川しがらみ渡し塞かませば流るる水ものどにかあらまし
（能杼尔賀有萬思）（万葉一九七）

……吹く風もおほには吹かず立つ波ものどには立たぬ（簀

跡丹者不_レ起）……（万葉三三三九）

海行波美_豆屍山行波草_牟屍王乃幣_尔曾_去死米能杼尔不_レ死（宣命・

第十三詔・続日本紀天平勝宝元年）

しかしながら、平安初期にノドカニ「内弁乃止加尔」（新撰字鏡）

が見えるようになって以降は、ノドカニが用いられるのが通常で、

ノドニは用いられなくなつて行く。

サヤニ 日の暮れに碓氷の山を越ゆる日は背せなのが袖そでもさや

に振らしつ（佐夜尔布良思都）（万葉三四〇二・東歌）――

サヤカニ 群鳥の朝立あさだちいにし君が上きみはさやかに聞ききつ

（左夜可尔伎吉都）思おもひしごとく（万葉四四七四）

ハルニ つのくにのなにはのあしのめもはるにしげきわがこ

ひ人しるらめや（古今六〇四）――ハルカニ 況や 仏教幽のハルカ

微ニクハシ（きをは）（知恩院蔵大唐三蔵玄奘法師表啓平安初期点・中

田祝夫氏釈文）

ホノニ なみのうへにほのにみえつつゆくふねはうらふく風

ぞしるべなりける（躬恒集三一五）——ホノカニ 聊注^三側聞^一（側^{保乃}加^{保乃}）（日本霊異記・上序・興福寺本）

のようなくニとくカニとが対応するものは、時代が下ると基本的にくカニの方が用いられるようになって行くようである。

白秋は、くカニが一般的であった時代に、擬古的（しかも上代語的）な意味合いを出すために、意図的にノドニと表現したものと考えられる。

なお、白秋『思ひ出』には、「野の皐月^{さつき}、空ものどかに、／白き雲ゆるかにわたり、」（人生）のように、ノドカニの例もあるが、これはユルカニと対句になるものである。

（蜂矢真弓）

ヒヒラワラフ

青き甕

（略）

『青甕^{あそがめ}ぞ。』——日もこそ青め、

言葉なし。——蛇^{へび}のとぐろを

香^{かう}匍^はひぬ、苦^く熱^{ねつ}り息^{いき}吹^ふ。

また過ぎぬ、ひひら笑ひぬ。

母なりき。——（母も座^ざにあり。）——
がらす戸の冷^{つめ}たき皺^{しわ}み。

（略）

（134ページ）

ヒヒラワラフは、ヒヒラ+ワラフという構成をもつ複合動詞と考えられる。以下、前項要素であるヒヒラについて検討する。

『日本国語大辞典』〔第二版〕にヒヒラは立項されていない。しかし、ヒヒラを語基とするヒヒラク（自力四）とヒヒラカス（他サ四）が立項されている。これらは、中古に例がみえる。

馬頭、物定め博士になりて、ひひらきゐたり。（源氏物語・帚木）

古き反古ひきさがし、おこなひがちに、口ひひらかし、数珠の音高きなど、…（紫式部日記）

それぞれ、「べらべらとしやべり続ける」「口をつぼめてぴちやぴちやと音をたててものをいう。ぺちやぺちやと口を動かす。また、口をふるわせる」という意味である。また、類聚名義抄（仏中二七オ・ウ）の「轉」「嘶」に「ヒ、ラク」がみえることから、語基ヒヒラはべらべら・ぺちやぺちやと「しやべる」「口を動かす」さまを表すと考えられる。ヒヒラワラフは、そのようなさまで笑う意だと考えることができる。

最後に、なぜ白秋はヒヒラワラフを造語しえたのか。白秋は、セセラワラフのセセラとの類推からヒヒラを導いた、と指摘できよう。セセラワラフは、近世の浄瑠璃にみえる。

平次景高せゝら笑ひ「どいつもこいつも吼面。…」（ひらがな盛衰記）

また『思ひ出』に近い時期では、泉鏡花『婦系図』（一九〇七年、ただし単行本は一九〇八年）にみえる。

「否、此處で話せうと云うたのは私ぢやで、君の方が病後大儀ぢやつたらう。しかし、こんな事を、好んで持上げたのは其方ぢやて、五分々々か、なう、はゝゝは、」と髯の中に、唇が薄く動いて、せゝら笑ふ。『婦系図』後篇五十二）

（清田朗裕）

ミダラガマシ

願人坊

（略）

乳母の背なかに目を伏せて

恐れながらにさし覗き、

淫^{みだ}らがましき身振^{みぶり}をば幽かにこころ疑^{うたが}ひぬ、

なんとなければおもしろく。

（略）

（150ページ）

ミダラガマシと同様の意味をもつ形容詞として、上代にミダラガハシの例がある。

妄^妄古記云、美太良加波志久（令集解・僧尼）

一方のミダラガマシは、かなり時代が下って、白秋『思ひ出』の他に、一九三九「昭和十四」年の次の例が見られる。

この寝床と寝床との間の奈良漬色の古畳の上にねろりと横はつた白いバンドを見續けてゐますと、（略）この紐から却つて淫^{みだ}らがましいものを感じられて不快になりました。（岡本

かの子『生々流転』、『岡本かの子全集』第六巻）

ところで、接尾辞ゝガマシと接尾辞ゝガハシをもつ形容詞とでは、ゝガマシの方が、ゝガハシより新しく「中古散文で新出したシク活用形容詞の接尾辞」（村田菜穂子氏『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』和泉書院、二〇〇五）であり、また、ゝガハシに比べて、「ゝガマシを語末にとるシク活用形容詞は（略）平安時代から室町時代にかけてその造語力は衰えず継続し、特に室町時代には活発に新しい語を形成している」（村田氏「形容詞化接尾辞——ゝガハシ・ゝガマシについて——」（『甲南女子大学大学院

論叢』第十三号)とあるように、現代に至るまで、接尾辞「ガマシ」をもつ形容詞の方が多い。

今、村田氏によると、「ガハシ」は「前項成素が、「乱」に関するもの(みだり・みだれ・ラウ)及びはぢ(恥)に限られ、他に造語力を發揮して」おらず、「乱」に関しては、それぞれ対応する「ガハシ」を接尾辞にもつ形容詞がいずれも「ガマシ」よりも先立つて確認できる。

ミダリガハシ 濫ミダリカハシ集 (図書寮本類聚名義抄)

ミダリガマシ 四角四面に喰ひしばつて猥褻がましい舉動はしない。(二葉亭四迷『浮雲』一・二三)

ミダレガハシ 濫就下盤 供養之處上へ濫ミダレミダレ (日本霊異記)

・中一・国会図書館本)

ミダレガマシ 我さへかきたえんも、さはいへど、乱れがましき心のままにやあらんと思ひて(夜の寢覚・卷二)

以上から、ミダラガマシも、同じく「乱」に関するものとして、ミダラガハシという語形から生じたと考えられる。

(藤本真理子)

メグシ〔シク活用〕

天童

(略)

さあれなほ白くめぐしく
天華とり、散らしながらも、
ああ、母よ、その乳こひしく、

(267ページ、補遺)

形容詞メグシは、「我が〔之〕小子の偏に鍾至也(り)て愛クメグいまししは、」(西大寺藏 金光明最勝王經平安初期点・春日政治氏釈文)のよう

に、本来ク活用である。

シク活用に用いられた例は、伊藤左千夫の短歌にも見える。
幼児は泣くもめぐしき七人の親おやなるからに然しかるにかあらむ
(一九〇八「明治四二」年詠)

いとけなくめぐしき児等こらが丹にのおもの輝かざくいまを貧しといは
めや(一九一三「大正二」年詠)

シク活用形容詞語幹の用法の例も、伊藤左千夫の短歌や、「女
声唱歌」(一九〇九「明治四二」年十一月)に掲載された唱歌
「美うまし夢」(通称「シューベルトの子守歌」)に見える。

手をめぐし足をめぐしみ緑児みどりこの手足よごしゝ猶なほしめぐしも

(伊藤左千夫、一九〇八「明治四二」年詠)

眠れ眠れ、可愛し緑子、母君に抱かれつ、／＼ここちよき、歌
声に、むすばずや、美し夢。(美し夢・一、近藤朔風(訳))

メグシとともに名詞十クシの構成とされるココログシは、伊藤
左千夫の短歌でも「春雨の夜を一人居り心ぐ」歌思へどもまとま
りかねつ」(二九〇二「明治三五」年詠)のようにク活用である。

万葉集のメグシ・ココログシは、「相見れば常初花に心ぐ
し(情具之)愛しもなしに(眼具之毛奈之尔)…」(三九七八)・
「心ぐし(己許呂具志)いざ見に行かなことはたなゆひ」(三九
七三)のような終止形の例では活用の種類がわからず、「人もな
き古りにし里にある人をめぐくや君が(慇久也君之)恋に死なせ
む」(二五六〇)の例はメグクの確例とするにやや難しいとも見
られ、「春日山霞たなびき心ぐく(情具久)照れる月夜にひとり
かも寝む」(七三五)の例はココログクと訓まれて、これらのこ
とが、ココログシがク活用に、メグシがシク活用に用いられる遠
因とも見られようか。

(蜂矢真郷)

なお、この欄を作成するに当たっては、大阪府立大学人間社会
学部准教授山東功氏の協力を得た箇所がある。ここに記して、感
謝の微意を示すものである。

〈補遺〉

前報告書に『邪宗門』の語彙について見たが、その際にとり挙
げた語が『思ひ出』にも見えるので、『思ひ出』の例を〈補遺〉
として挙げておく。

サミシラニ

断章／二十二

わが友はいづこにありや。

晩秋の入日の赤さ、さみしらにひとり眺めて、
掻いさぐるピアノの鍵の現なき高音のはしり、
かくてはや、独身の、独身の今日も過ぎゆく。

(73ページ)

スユシ

断章／四

あはれ、わが君おもふオロンの静かなるしらべのなかに、
いつもいつも力なくまぎれ入り、鳴きさやぐ驢馬のにほひ
よ、

あはれ、かの野辺に寝ねて、名も知らぬ花のおもてに、
あはれ、あはれ、酸ゆき日のなげかひをわれひとり嗅ぎそめ
てより。

(65ページ)

ヒヤシ

断章／二十四

泣かまほしさにわれひとり、
冷やき玻璃戸に手もあてつ、
窓の彼方はあかあかと沈む入日の野ぞ見ゆる。
泣かまほしさにわれひとり。

(74ページ)

今日よりは

今日よりは汝と遊ばじと
二人して友はかへりぬ。
あかあかと野辺に風吹き、
はるかなるわが家のけむり
酒倉の冷やき長壁、
なべてみな暮れて嘲みき。
今日よりは汝と遊ばじと。

(268ページ、補遺)

ユルカ

人生

野の皐月、空ものどかに、
白き雲ゆるかにわたり、
畑にはからし花咲き、
雲雀また妙にうかびぬ。

(略)

(131ページ)

また、前報告書に見た「ウヅクム」(岡崎友子担当)の項に、「天鷲絨のにはひ」の例を挙げて、「与謝野晶子『晶子詩編全集』實業之日本社・一九二九」としたが、「天鷲絨のにはひ」は北原白秋『邪宗門』所収であるので、訂正する。

なお、ウヅクムは、馬琴の椿説弓張月・前二に、「女使ども驚きまどひ、みな一帯に蹲踞ぬ。」と見える(岡崎氏の御教示による)。

また、前報告書に示さなかったが、そこに見た『邪宗門』の例のうち、223(229)ページのは再版の増補の例、231(264)ページのものは改訂三版の「邪宗門拾遺」の例である。